

御津町埋蔵文化財発掘調査報告10

# 備前原遺跡

2002年3月

岡山県御津町教育委員会

# 例言

- 1 本書は、岡山市消防局北消防署御津出張所建設に伴い、御津町教育委員会が主任 長谷川一英を担当者として実施した、「備前原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は岡山県御津郡御津町大字宇垣字山 條140番地の2に所在する。
- 3 現地での発掘調査は1990年4月2日から5月23日まで、出土遺物の洗浄、注記は5月31日まで実施し、2001年度に本書の作成を行った。
- 4 調査及び本書の作成にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、岡山大字埋蔵文化財調査研究センター、御津町役場、地元宇垣地区の方々、御津町文化財保護委員会等から、ご指導、ご支援を賜った。深く感謝の意を表します。  
また、別記作業員の方々のご協力も得た。
- 5 出土遺物、図面、写真は御津町教育委員会で保管している。広く活用されることを望む。
- 6 本書の執筆、編集は長谷川があたった。

# 凡例

- 1 土層断面図等の高度はすべて海拔高度である。  
方位は図1~3が真北、他が磁北である。備前原遺跡附近の磁針方向は西偏約  $6^{\circ}30'$  である。
- 2 遺物実測図の縮尺率は土器1/4、打製石器2/3、磨製石器1/2を基本とする。石器の網点は磨滅部分を示す。
- 3 遺跡名の略号は『BHR90』とした。BHRは備前原 (BiZeN-HaRa) 90は調査年度を表す。  
遺物には、取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日順に01から登録番号を付与した。遺物への注記は『BHR90-登録番号』のみとし、出土層位・遺構・年月日は別途作成した遺物台帳に記録している。
- 4 遺物の取り上げ、本書の記述に際して、遺構名に以下の略号を使用した。  
SD…溝・流路  
SK…土壇  
SP…ピット  
また、各遺構種別ごとに、検出順に01から遺構番号を付与し、遺構略号の後に示した。

# 目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
I 地理的・歴史的環境	1
II 調査の経緯と経過	4
1 調査に至る経緯	4
2 調査日誌(抄)	4
III 調査成果	7
1 はじめに	7
2 第1層	7
3 第1遺構面	8
4 第2層	13
5 第2遺構面	16
6 第3層	18
7 第3遺構面	19
8 第4層	22
9 第4遺構面	27
10 第5層	27
11 第5遺構面	35
12 第6層	36
13 第6遺構面	37
14 第7層	38
15 第7遺構面	41
16 第8層	41
17 第8遺構面	43
18 第9層	43
19 第9(最終)遺構面	47
IV まとめ	49
土器観察表	51

石器観察表 .....	57
報告書抄録 .....	73

## 目 次

図1 御津町位置図 .....	1	図24 第4層出土遺物実測図(4) .....	26
図2 調査地周辺遺跡分布図 .....	3	図25 第4層出土遺物実測図(5) .....	27
図3 調査地位質図 .....	5	図26 第4遺構面平面図 .....	28
図4 調査地周辺平面図 .....	6	図27 第5層出土遺物実測図(1) .....	29
図5 第1層出土遺物実測図 .....	8	図28 第5層出土遺物実測図(2) .....	30
図6 調査地東壁土層断面図 .....	9-10	図29 第5層出土遺物実測図(3) .....	31
図7 調査地南壁土層断面図 .....	11-12	図30 第5層出土遺物実測図(4) .....	32
図8 第1遺構面平面図 .....	13	図31 第5層出土遺物実測図(5) .....	33
図9 第2層出土遺物実測図(1) .....	14	図32 第5層出土遺物実測図(6) .....	34
図10 第2層出土遺物実測図(2) .....	15	図33 第5層出土遺物実測図(7) .....	35
図11 第2遺構面平面図 .....	16	図34 第5遺構面平面図 .....	36
図12 畦畔1土層断面図 .....	17	図35 第6層出土遺物実測図 .....	37
図13 畦畔1出土遺物実測図 .....	17	図36 第6遺構面平面図 .....	37
図14 畦畔2土層断面図 .....	18	図37 第7層出土遺物実測図(1) .....	39
図15 畦畔2出土遺物実測図 .....	18	図38 第7層出土遺物実測図(2) .....	40
図16 第3層出土遺物実測図 .....	18	図39 第7遺構面平面図 .....	41
図17 第3遺構面平面図 .....	19	図40 第8層出土遺物実測図 .....	42
図18 SD01土層断面図 .....	20	図41 第8遺構面平面図 .....	43
図19 SD01出土遺物実測図 .....	21	図42 第9層出土遺物実測図(1) .....	45
図20 SD02出土遺物実測図 .....	21	図43 第9層出土遺物実測図(2) .....	46
図21 第4層出土遺物実測図(1) .....	23	図44 第9層出土遺物実測図(3) .....	47
図22 第4層出土遺物実測図(2) .....	24	図45 第9(最終)遺構面平面図 .....	48
図23 第4層出土遺物実測図(3) .....	25	図46 層序模式図 .....	49

# 写真目次

写真1	調査地周辺航空写真	61	写真12	第4層上層出土土器	67
写真2	調査地遠景(西から)	62	写真13	第4層下層出土土器	67
写真3	第1遺構面(東から)	62	写真14	第5層上層出土土器	68
写真4	第2遺構面(東から)	63	写真15	第5層下層出土土器	68
写真5	第3遺構面(東から)	63	写真16	第7層出土土器	69
写真6	第4遺構面(東から)	64	写真17	第9層上層出土土器	69
写真7	第9(最終)遺構面(東から)	64	写真18	出土打製石器	70
写真8	第2層上層出土土器	65	写真19	出土磨製石器	70
写真9	第3層出土土器	65	写真20	第9層下層出土土器	71
写真10	SD01出土土器	66	写真21	出土遺物(1)	71
写真11	SD02出土土器	66	写真22	出土遺物(2)	72

# 調査参加者

北山君恵 北山謙吾 古家悦子 高角光恵 田口静子 寺門和寿 寺門順子 寺門秀夫  
吉村弘 吉村芳子 吉行久枝

# I 地理的・歴史的環境

岡山県御津郡御津町は、県北の蒜山山麓に源を発し、県域の中央を瀬戸内海へ注ぐ旭川のほぼ中流域に位置し、1955年の町村合併により誕生した町である。『御津』の名は、1900年、御野郡と津高郡の合併により御津郡が設置されたことに由来している。近年、工業団地造成による企業の進出、近隣に空港、高速道路のインターチェンジの開設、岡山市に隣接することから宅地開発等によって、従来の水田の広がる農村から姿を変えつつある。

町域の約8割は山林で、西部には吉備高原に続く標高400m級の山地も見られる。それらの山地の間を流れる旭川とその支流沿いに平地が形成されている。遺跡の多くはそこに立地している。

備前原遺跡は、旭川と南西から東流する三谷川によって旭川右岸に形成された平地上に存在している。平地内には畚谷、山條、鳴から三谷川へ至る低地部がみられることから、今回の調査でも検出したような旧河道が何本が存在し、これらによって分断された微高地上に遺跡は立地している。



図1 御津町位置図

御津町内では圃場整備が進められ、それに伴う発掘調査が実施されたこともあって、原始・古代の姿が明らかになってきている。町内で最も古い遺物は平岡西遺跡で出土した縄文時代早期末の土器片である。前期の土器片も出土している。後期のものは寺部遺跡、鍛冶屋谷遺跡、伊田沖遺跡、備前原遺跡等から出土している。晩期のものは前述の遺跡に加えて、鹿瀬遺跡、野々口遺跡等で出土している。野々口遺跡ではドングリが出土し、現在でもトチが出土していることから、貯蔵穴の存在が想定できる。

弥生時代の遺跡は縄文時代から続いて営まれたものの他に、矢知遺跡、新庄尾上遺跡、上伊田遺跡等、五城地区に多く見られる。これは、発掘調査が行われたのが宇垣地区と五城地区を中心とするためであり、1998年度から県教育委員会によって行われている県内遺跡詳細分布調査によって、従来、遺跡の希薄であった地区においても小規模ながら散布地が発見されている。おそらく、弥生時代中・後期になると町内全域で集落が形成されていたのであろう。これらの遺跡は以降も連続と営まれ、それぞれの時期の遺物が出土している。特記されるのは、備前原遺跡の北西に存在していた西奥遺跡である。特殊壺、特殊器台を伴う土壇墓を検出している。

古墳は、新庄川水系に前方後円墳の天神鼻1号墳、八ッ塚古墳が、宇甘川水系に前方後方墳の菅2号墳が存在する。備前原遺跡周辺では、北東の丘陵上に6世紀に位置付けられる金川古墳が存在した。西側の丘陵上には7基の古墳から成る宇根山古墳群が存在する。しかし、原遺跡の規模から見て、その数は少ないと言えよう。

奈良時代になると、1988年度に町教育委員会が実施した原遺跡山篠・富谷地区の調査において、同時期の瓦が多量に出土している。軒丸瓦には備中国分寺、美作国分寺等で出土したものに類似したものが含まれている。私寺・氏寺の一つが営まれていたのであろうか。

中世になると、水陸交通の要衝として、金川城、徳倉城をはじめ、多くの山城が築かれるようになる。町内の金川は、西備前の有力戦国大名である松田氏の居城である金川城の城下町として栄えた。また、津山往来、旭川の水運の中継地としても賑わった。

- |                |          |
|----------------|----------|
| 1 散布地          | 9 散布地    |
| 2 金川(玉松)城      | 10 散布地   |
| 3 菅1号墳         | 11 野々口遺跡 |
| 4 菅2号墳         | 12 散布地   |
| 5 備前原遺跡(☆は調査地) | 13 虫名1号墳 |
| 6 宇根山古墳群       | 14 虫名2号墳 |
| 7 散布地          | 15 散布地   |
| 8 散布地          | 16 恋坂古墳  |

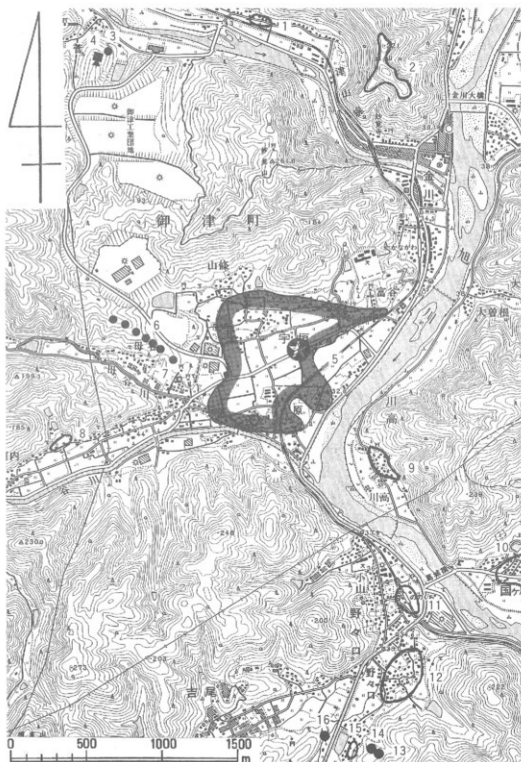


図2 調査地周辺遺跡分布図



## Ⅱ 調査の経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

御津町の消防体制は御津町消防団が担ってきた。しかし、工業団地の造成等企業誘致が進むにつれ、それらの有事への対応がボランティアである消防団員では難しくなってきた。また、国道55号等の通行量の増大から、事故の増加も懸念されていた。高度の装備と技術・知識をもつ常備組織消防の整備が求められるようになってきた。行政においても種々検討を重ね、岡山市へ消防、救急業務を委託することになった。

そこで、御津町での活動拠点である岡山市消防局北消防署御津出張所を建設することとなった。設置場所について、町内各所への到達時間等を勘案し、宇垣地区が候補地となった。該当地区は全面に圃場整備が実施され、農地転用は困難であったが、県道妹尾・御津線沿いに用地が確保出来た。しかし、宇垣地区はほぼ全域が周知の遺跡である備前原遺跡のため、屋舎建築に先立って発掘調査が必要になる。町役場より町教育委員会へ調査について打診があったが、町教委の調査員は五城地区で県営圃場整備事業に伴う新庄尾上遺跡の調査に従事していた。消防体制の早期整備という重要性から、圃場整備事業主体者の岡山県岡山市地方振興局、地元地権者の方々にご理解を頂き、新庄尾上遺跡の調査を一時中断して備前原遺跡の調査を実施することとなった。

1998年3月8日付け、御総第1372号で御津町長より文化財保護法第37条の3に基づく発掘の通知があり、町教委は同日付け、御地教第1903号で岡山県教育委員会教育長へ進達した。3月15日付け、教文理第5038号で県教委教育長より発掘調査を実施するむね通知があった。

3月8日付け、御地教第1901号で町教委教育長より保護法第33条の2に基づく発掘調査の通知を通知した。現地での調査は、屋舎部分約300㎡を対象に、4月2日～5月23日まで実施した。

### 2 調査日誌 (抄)

- 3月18日 耕作土機械掘削
- 4月2日 機材撤入 第1層掘削開始
- 4月7日 第1遺構面 精査 遺構掘削 写真撮影 平板実測 第2層掘削開始
- 4月9日 北壁東半・西壁北半土層断面 写真撮影 実測
- 4月10日 北壁西半土層断面 写真撮影 実測
- 4月14日 第2遺構面 平板実測
- 4月16日 第2遺構面 精査 写真撮影 第3層掘削開始

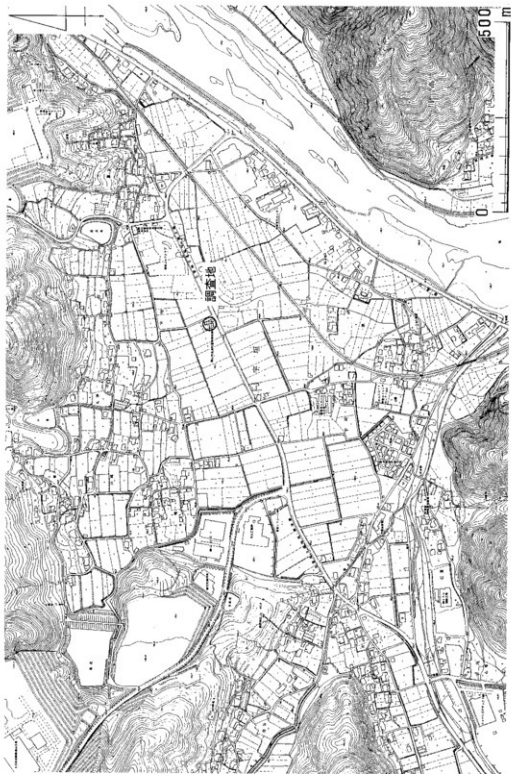


図3 調査地位置図

- 4月18日 SD01土層断面 写真撮影 実測
- 4月19日 畦畔土層断面 写真撮影 実測
- 4月25日 第3遺構面 精査 写真撮影 平板実測 第4層掘削開始
- 5月1日 第4遺構面 精査 写真撮影 平板実測 第5層掘削開始
- 5月9日 第5遺構面 精査 写真撮影 平板実測 第6層掘削開始
- 5月10日 第6遺構面 精査 写真撮影 南壁西半土層断面 写真撮影 実測
- 5月11日 第6遺構面 平板実測 第7・8層掘削開始 南壁東半土層断面 写真撮影 実測
- 5月12日 第7・8遺構面 平板実測 第9層掘削開始
- 5月17日 第9遺構面 平板実測
- 5月21日 第9遺構面 写真撮影 東壁土層断面 実測
- 5月22日 東壁土層断面 写真撮影 実測 機材撤収 新庄尾上遺跡の調査現場へ
- 5月23日 東壁土層断面 実測 調査地周辺 平板実測

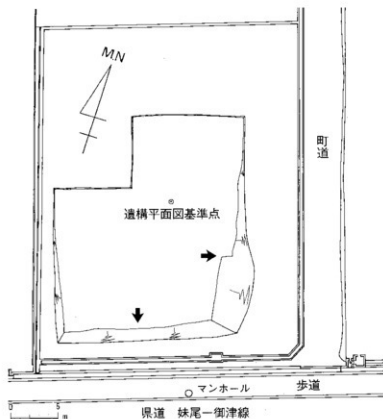


図4 調査地周辺平面図 (矢印は土層断面観察方向)

# Ⅲ 調査成果

## 1 はじめに

備前原遺跡は御津町大字宇垣に位置する縄文時代からの複合遺跡で、1958年に鎌木義昌、江坂進の両氏によって紹介された。採集遺物ではあるが、縄文時代晩期中葉に位置付けられる『原下層式』土器が報告されている。

その後、本格的な調査がなされることもなく、県立金川高等学校地歴部による採集遺物が町教委に保管されている程度であった。1980年頃から、宇垣地区で県営圃場整備事業が計画され、それに伴い、82年度に県教委によって備前原遺跡の範囲確認調査が実施された。その結果に基づき、保存協議がなされたが、なお削平される部分について90～92年度に町教委によって発掘調査が実施された。種々の成果が得られたが、縄文時代晩期の遺物については顕著なものはなく、岡山市域で晩期の遺跡の調査が進んだこともあって、『原下層式』土器もいわば過去の形式となっていた。

今回の調査は建築計画の関係から、時間的に余裕の少ないものであった。調査着手時には、用地は盛土用のコンクリート擁壁に囲まれていた。掘削土の崩上もままならず、やむを得ず、第1遺構面で地山面に達した調査区北半の突出部を排土置場とした。

調査は遺構面を確認することに上層から第1遺構面、第2遺構面…とし、第9遺構面まで確認した。また、それぞれの遺構面の覆土を第1層、第2層…とし、第9層までが遺物包含層で、以下の土層には遺物は含まれていなかった。そのため、掘削を終了し、第9層、第9遺構面を最終とした。

第1層は調査地全面に堆積していたが、第2層より下層は調査地南半にのみ堆積していた。

## 2 第1層

第1層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、サヌカイト片約120g、焼土塊、鉄滓と多様な遺物が整理箱半箱分ほど出土したが、小片が多く、図示出来るものは少ない。

1～2は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の壺、甕の口縁部である。1の端部は上方に狭み上げられている。2の外面には2条の凹線状のものを施す。下方は剝離している。5の焼成はやや軟質である。7は二重口縁の口縁部下半である。21は精良な胎土の甕である。22は土師器の小型壺である。23は土師器の広口壺である。24～27は壺、甕の底部である。26の内面は剝離している。28～35は高杯である。29～31の脚部は差込み技法である。35の器壁は比較的薄く、内外面とも成形時の圧痕が残存している。7・11・19・21・24・34の外面には赤色粘土による丹塗り

を施す。6・12の外面上には煤が付着している。36は黒色土器A類の椀底部である。高台は断面三角形でしっかりしている。S1はサヌカイト製の打製石蕨木成品である。自然面が残存している。S2はサヌカイトの割片である。

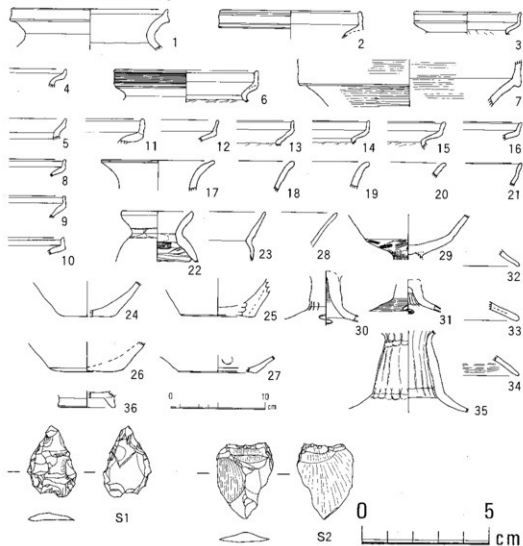


図5 第1層出土遺物実測図

### 3 第1遺構面

第1遺構面は調査地全面で検出した。北側の突出部は地山面で南へ傾斜が著しく、南側はほぼ平坦である。検出面のレベルは32.9～33.6mである。

遺構は全面で土壌を検出した。遺物の出土したものは少なく、出土遺物も細片で図示出来るものは無い。

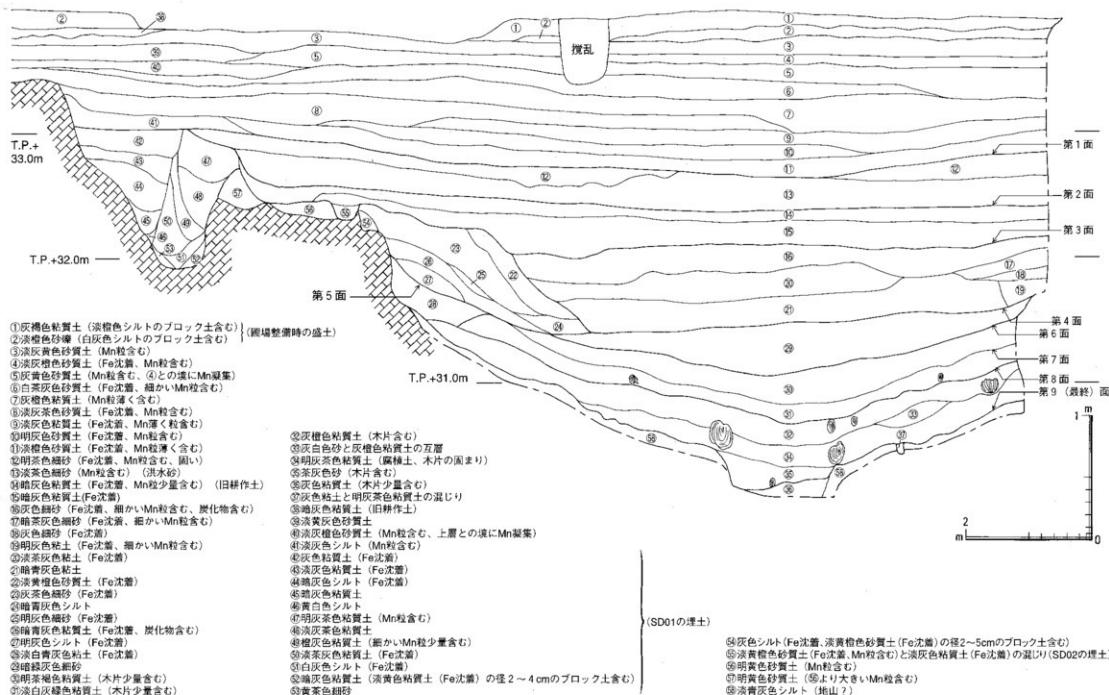
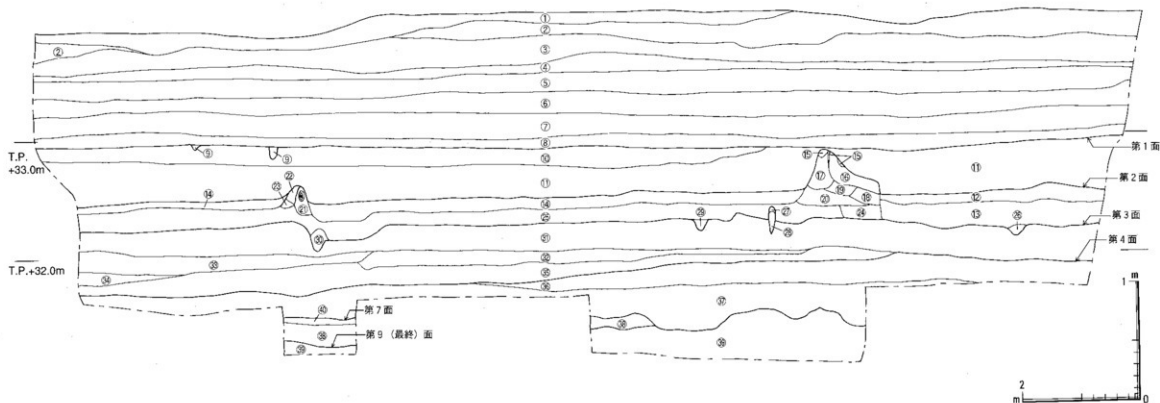


図6 調査地東壁土層断面図



- ① 灰褐色粘質土 (淡褐色シルトのブロック土含む) } (築場整備時の盛土)  
 ② 淡褐色細砂 (白灰色シルトのブロック土含む)  
 ③ 淡黄褐色砂質土 (Mn粒含む)  
 ④ 淡灰褐色砂質土 (Fe沈澱、Mn粒含む、下層との境にMn層)  
 ⑤ 灰黄色砂質土 (Mn粒含む)  
 ⑥ 灰褐色粘質土 (Mn粒薄く含む)  
 ⑦ 淡灰色粘質土 (Fe沈澱、Mn粒薄く含む)  
 ⑧ 淡褐色砂質土 (Fe沈澱、Mn粒薄く含む)  
 ⑨ 淡灰色シルト  
 ⑩ 明茶色細砂 (Fe沈澱、Mn粒含む、固い)  
 ⑪ 淡茶色細砂 (Mn粒含む) (流水砂)  
 ⑫ 淡灰色粘質土 (Mn粒含む)  
 ⑬ 淡灰色シルト (Fe沈澱、Mn粒少量含む)  
 ⑭ 暗灰色粘質土 (Fe沈澱、Mn粒少量含む) (旧耕作土)

- ⑮ 淡灰色細砂  
 ⑯ 明茶黄色シルト (Mn粒多く含む、固い)  
 ⑰ 灰黄色シルト (灰色粘質土のブロック土含む、Mn粒含む)  
 ⑱ 灰色粘質土 (Mn粒少量含む)  
 ⑲ 灰色シルト (Fe沈澱、Mn粒多く含む)  
 ⑳ 灰茶色シルト (Fe沈澱、Mn粒含む)  
 ㉑ 暗灰色粘質土 (Fe沈澱)  
 ㉒ 明茶黄色粘質土 (Mn粒含む)  
 ㉓ 明茶黄色粘質土 (Mn粒含む、炭化物含む)  
 ㉔ 明灰色シルト (Fe沈澱)  
 ㉕ 暗灰色粘質土 (Fe沈澱)  
 ㉖ 淡灰色シルト  
 ㉗ 灰色粘土  
 ㉘ 暗茶色砂質土 (Fe沈澱、炭化物含む)

- ㉙ 暗灰色粘質土  
 ㉚ 暗灰色粘土 (Fe沈澱)  
 ㉛ 灰色細砂 (Fe沈澱、細かいMn粒含む、炭化物含む)  
 ㉜ 淡灰色粘質土 (細かいMn粒含む)  
 ㉝ 暗茶灰色細砂 (Fe沈澱、細かいMn粒含む)  
 ㉞ 灰色細砂 (Fe沈澱)  
 ㉟ 明灰色粘土 (Fe沈澱、細かいMn粒含む)  
 ㊱ 白灰色シルト (Fe沈澱)  
 ㊲ 淡白緑灰色シルト (Fe沈澱)  
 ㊳ 淡白緑灰色粘質土 (木片含む)  
 ㊴ 暗青灰色シルト  
 ㊵ 暗青灰色粘質土 (炭化物含む)

図7 調査地南盤土層断面図

SK01は突出部で検出した。長径1.0m、短径0.8m、深さ7m、平面ほぼ円形である。弥生時代後期の土器細片2点、古墳時代前期初めの丹塗り小型蓋片1点が出土した。

SK02は調査地東辺でその一部を検出した。径1.2m、深さ0.25m、平面円形になると思われる。弥生土器か土師器の細片4点が出土した。

SK03は調査地中央西寄りで検出した。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.2m、平面台形である。弥生土器の細片4点が出土した。

SP01は調査地東辺中央で検出した。長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m、平面楕円形である。弥生土器の細片2点が出土した。

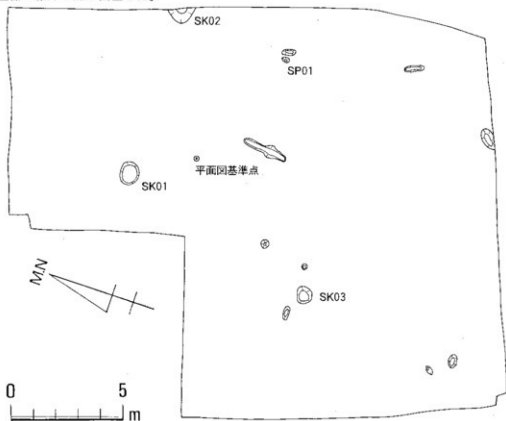


図8 第1遺構面平面図

## 4 第2層

第2層は調査地南半に0.2~0.4mの厚さで堆積した細砂層である。一部にその上面に厚さ0.1m程度の粘質上層が見られた。第2層を掘削したことで、調査地中央で東西方向の段差が生じた。

上層の粘質上層からは弥生土器、土師器、サヌカイト片2点が出土したが、小片が多い。図



9は同層より出土したものである。下層の細砂層からは弥生土器、土師器、サヌカイト片約50gが出土したが、出土量も少なく、小片で磨滅したものが多い。図10は同層より出土したものである。

37~47は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の壺、甕の口縁部である。37は二重口縁壺である。43は二重口縁壺の頸部である。46の成形は粗く、端部は波打っている。48・49は甕である。50の外面には右上がりのたたきを施す。内面には成形時の撫で上げ痕が残存している。2次焼成を受けている。51は小さな平底をもつ底部である。52・53は高杯である。脚部は差込み技法である。

54~60は弥生時代後期の甕、甕の口縁部である。54の端面には2条の凹線を施す。56は成形が粗いため、端部が波打っている。58は直口甕である。外面に2条の凹線が見られる。61はほぼ完形の甕である。胴部最大径は上方にあり、肩が張っている。62~66は弥生土器の底部である。63の外面には黒斑が見られる。65の底外面は黒色を呈する。67は直口甕の口縁部であろう。68~71は高杯である。69の脚部は差込み技法である。72は台付椀の底部である。台部は摘み出して形成され、成形痕が残存している。37・45・52・53・57・63・70~72の外面には赤色粘土による丹塗りを施す。48・49にもわずかに何える。38・39・46・61の外表面、65の内面には炭化物が付着している。53・4はサヌカイトの割片である。53は全体に風化が著しく、乳白色を呈する。54も風化が進んでいる。55は花崗岩製の偏平な長円形の敲石である。上下端に打撃痕が見られ、全体に磨滅している。自然石の可能性もある。56は花崗岩製の球状の敲石である。上下端と周囲3

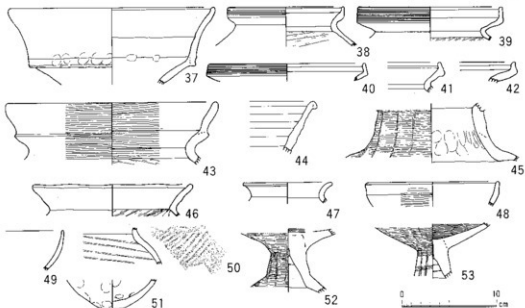


図9 第2層出土遺物実測図(1)

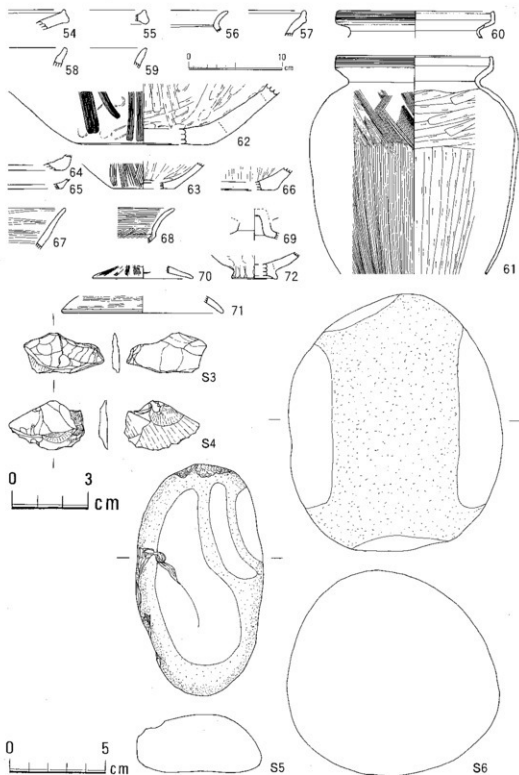


图10 第2層出土遺物実測図(2)

ヶ所が磨滅している。

第2層下層であるが、均質な細砂が0.4mもの厚さで均等に堆積している。また、出土遺物も少なく、磨滅している。これらのことから、この細砂は洪水によってもたらされたものと想定される。

## 5 第2遺構面

第2遺構面は第2層とした細砂層を除いた面である。

北半の高位部から派生し、ほぼ南方向へ平行して延びる2条の土堤を検出した。土堤間は平坦である。東側の区画のレベルは32.50m、中央は32.48m、西側は32.40mと西へ漸次下がっている。土堤は第2遺構面よりさらに0.1~0.3m下の面、後述する第3遺構面から粘質土、シルトを積み重ねて形成されている。土堤間に厚さ0.1~0.3mのマンガン粒を少量含み、鉄分が沈着した粘質土が均等に堆積している状況が見られた。これらより、第2遺構面は水田面であり、土堤は畦畔であると考えられる。そこで、西側の土堤を畦畔1、東側のものを畦畔2とした。

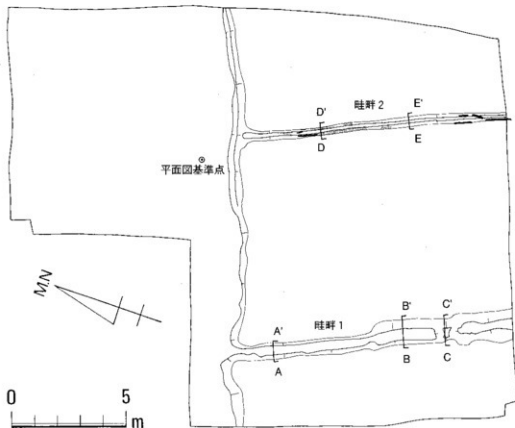


図11 第2遺構面平面図

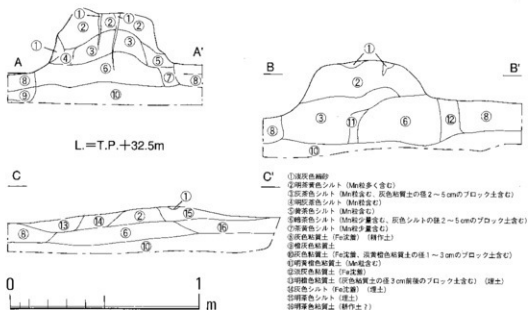


図12 畦畔1土層断面図

畦畔1は断面台形で、検出範囲北側では基底部で幅0.75m、南側では幅0.80mである。高さは中央水田面基準で、北側では0.3m、南側では0.2mである。また、調査地南壁から3m付近は長さ約1mにわたって低くなり、最低で高さ0.1mである。

畦畔1からは縄文土器、弥生土器、土師器、サヌカイト片が出土したが、小片で磨滅しているものが多く、図示出来るものは少ない。

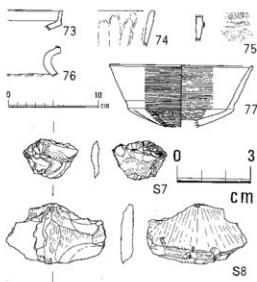


図13 畦畔1出土遺物実測図

73は甕の口縁部である。74は直口壺の口縁部である。胎土は精良である。75は断面台形の貼付け突帯をもつ胴部である。磨滅しているが、突帯には刻目を施す。縄文時代晩期の深鉢であろうか。76は頸部である。端面に1条の凹線が残存している。77は高杯の杯部である。赤色粘土による丹塗りを施す。S7はサヌカイト製の楔形石器である。S8はサヌカイトの胴片である。

畦畔2は断面半円形で、基底部で幅0.3~0.5m、高さは約0.1mである。畦畔の側面に畦畔と平行して径0.1m程度の木材を埋め込んでいる状況を検出した(図11畦畔2黒色部)。また木材が腐植したものであろう淡青灰色シルトを0.03

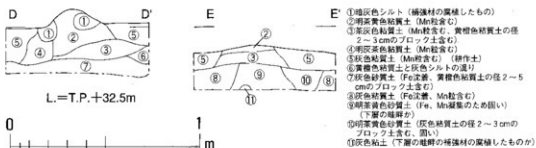


図14 畦畔2土層断面図



図15 畦畔2出土遺物実測図

～0.1m幅で検出した（図11畦畔2網点部）。畦畔の補強、土止めのためのものであろう。

畦畔2からは少量の弥生土器、サヌカイト片が出土した。

78は甕の、79は壺の口縁部である。

水田への導水は、東から畦畔2を越流し、畦畔1の低位部を抜けて西へ流れたと考えられる。

## 6 第3層

第3層は第2遺構面で検出した水田の耕作土層である。厚さ0.1～0.3mの粘質土層である。

縄文土器、弥生土器、土師器、サヌカイト片約50g等が出土したが、出土量も少なく、小片が多く、図示出来るものは少ない。

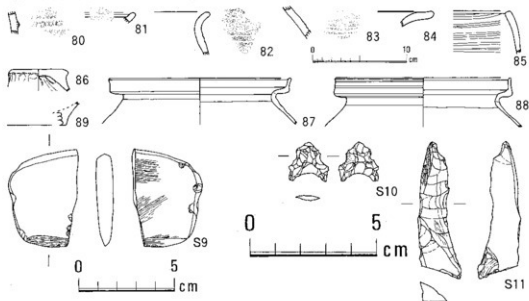


図16 第3層出土遺物実測図

80は断面三角形の貼付け突帯をもつ胴部である。突帯には刻目を施す。縄文時代晩期の深鉢であろうか。81は内面に1条の凹線をもつ口縁部である。82は口唇部に不明瞭ながら刻目、胴部に2条の沈線を施す。83は4条の沈線が残存している。85は縄文時代晩期の鉢である。端部は面を成す。86は蓋である。内外面に成形時の圧痕が残存している。87・88は甕口縁部である。88の口縁部外面には2条の沈線様のものが見られる。89は底部である。内面は剥離している。S9は砂岩製の磨製石包丁である。S10はサヌカイト製の打製石鏃である。S11はサヌカイトの削片である。これらの他に、径5aの球状の焼土塊も出土した。

## 7 第3遺構面

第3遺構面は第3層とした水田耕作土層を除いた面である。検出面のレベルは32.0~32.2mでほぼ平坦である。第1遺構面で検出した地山面から今回の検出面へ向かって、幅1m前後の段を挟んで、緩やかに傾斜している。

傾斜面で2条の溝を検出した。

SD01は調査地を東西に横断して検出した。検出範囲では幅1.4~2.0m、深さ0.8mである。底

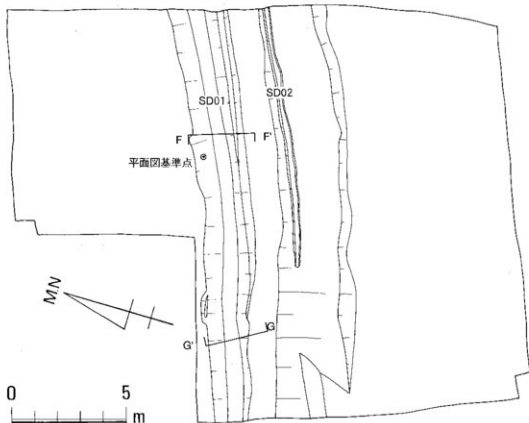


図17 第3遺構面平面図

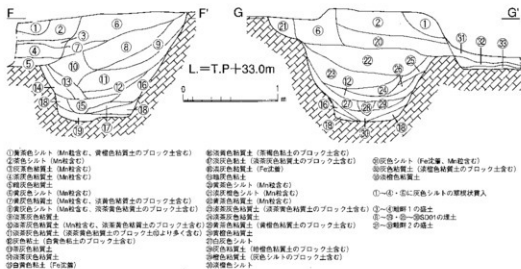


図 18 SD01 土層断面図

面はわずかに東へ傾斜している。南岸の一部は堤状に盛り上がっている。土層断面観察より、埋没後、掘削し直されている状況が伺える。埋土の土質はシルト～粘質土であることから、流勢は穏やかであったのであろう。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土したが、出土量は少なく、磨滅している。

90・91は縄文時代晩期の土器である。90は深鉢で、断面半月形の貼付け安帯をもつ。口唇部と安帯に刻目を施す。91は浅鉢である。端部は擴み出され、肥大している。92～97は弥生土器である。93は壺の胴部である。2条の沈線を施した上方に、1条の浅い凹線を施す。段を意図したのであろうか。炭化物が付着している。94は甕の頸部直下である。3条の沈線を施す。外面の一部が橙色を呈する。彩色であろうか。S12はサヌカイト製の打製石包丁である。下辺には細部調整で刃を作り出している。抉り部は磨滅している。S13はサヌカイト製の刀子状の石器である。裏面のほぼ全面が磨滅している。S14はサヌカイト製の刮片である。自然面が残存している。この他に、径5mm程度の不定形の焼土塊1点、重さ479gのサヌカイトの石核が出土した。

SD01の最下層からは上器片3点、打製石錐1点、サヌカイト片2点が出土した。

S15はサヌカイト製の打製石錐である。風化が進み、淡灰色を呈する。S16はサヌカイトの刮片である。自然面が残存している。もう1点のサヌカイト片もかなり風化している。

SD02はSD01の南側約2mで並行して検出した。調査地中央から始まり、東へ延びる。底面は東へ傾斜している。検出範囲で幅約0.4m、深さ約0.15mである。埋土は砂質土と粘質土の混じったものである。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土した。

98～100は弥生時代前期のものである。98の端部はやや肥大し、面を成す。99の口唇部には刻目を施す。外面には煤状のものが付着している。100は2条の沈線が残存している。S17はサ

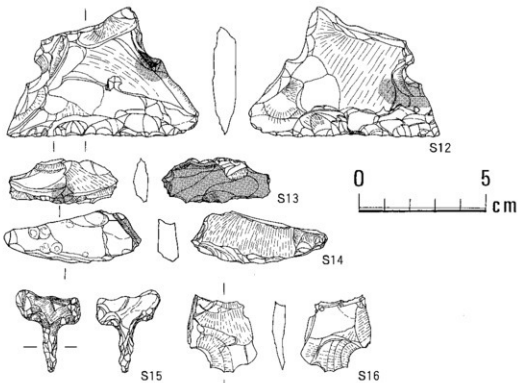
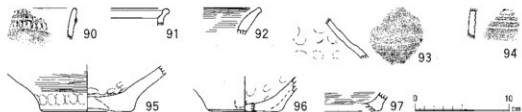


図19 SD 01 出土遺物実測図

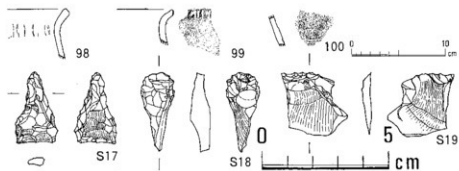


図20 SD 02 出土遺物実測図



ヌカイト製の打製石礫未製品である。S18・19はサヌカイトの剥片である。この他に径1a程度の球状の焼土塊1点が出土した。

## 8 第4層

第4層は第2遺構面で検出した水田の基盤層である。また、これ以降掘削することとなる旧河道の最終堆積でもある。調査地南側1/3程度で見られた。2層に分けられ、上層は厚さ0.1～0.2mの細砂層、下層は0.3～0.4mの粘土層である。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約260g等が出土した。図21・22は同層より出土したものである。下層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約120g等が出土したが、小片で磨滅している。図23・24・25は同層より出土したものである。

101・102は縄文時代晩期の深鉢である。101の端部は面を成す。口唇部と断面三角形の貼付突帯に刻目を施す。102は断面台形の貼付突帯に不明瞭ながら刻目を施す。103～113は弥生土器の壺、甕の口縁部である。103は口唇部に刻目を施す。104は口唇部に刻目を、頸部に3条の沈線を施す。106は口唇部に刻目を、頸部に2条の沈線を施す。108の端部は押圧でやや肥大している。110の端部は拡張され面を成す。112の口唇部には浅い刻目を施す。114～121は施文のある胴部である。114は4条の沈線が残存している。115は頸部に不明瞭だが7条の沈線を施す。116は胴部上方に2条の沈線が残存している。117は断面台形の貼付突帯に刻目を施す。118は胴部上方に3条の沈線と2列の刺突文を施す。119は5条の沈線が残存している。120は扇状に下方へ開く7条の沈線が残存している。121は断面三角形の低い突帯を貼付ける。焼成はやや軟質である。122～124は縄文時代晩期の底部である。123の底面は上げ底である。124の底面もやや上げ底である。125～129は弥生土器の壺、甕の底部である。128の内面は剝離している。130は弥生土器の高杯脚端部である。矢羽状透かしを施すが、内側へ貫通していない。S20～22はサヌカイト製の打製石礫である。S21は先端が欠損している。自然面が残存し、全体にやや磨滅している。S23はサヌカイト製の楔形石器である。下辺に刃の潰れが見られる。S24はサヌカイト製の刀子状の石器である。周囲に細部調整を施す。打製石槍か石礫の未製品であろうか。S25～30はサヌカイトの剥片である。S31は花崗岩製の敲石である。ほぼ全面が磨滅し、下端に打撃痕が見られる。自然石の可能性もある。S32は砂岩製の偏平な石器である。上下面は磨滅している。砥石であろうか。この他に焼土塊115gが出土した。

131～145は弥生土器である。131～135は甕である。131は口唇部に刻目を、頸部に3条の沈線を施す。132・133は口唇部に刻目を施す。134の端部は拡張され、面を成す。外面に煤が付着している。136～141は施文のある胴部である。136～138はへらみがき調整の後、1～2条の沈線を施す。139はほぼ平行する縦方向の沈線を施す。縄文時代晩期の深鉢の頸部の可能性もあ

る。140は縦方向のへらみがき調整後、4条1単位の櫛状原体で上から波状文2段、直線文2段、波状文2段の櫛指沈線文を施す。直線文を後に施文する。外面に黒斑が見られ、内面には炭化物状のものが付着している。141はへらみがき調整後、多条沈線を施す。8条が残存している。142~145は底部である。S33はサヌカイト製の打製石鏝である。先端から1/4ほどは磨滅している。特に先端部は良く磨滅している。S34~39はサヌカイトの割片である。S35・37・38は自然面が残存している。S40は花崗岩製の卵形の磨石である。周辺に打撃痕が見られ、上下面は磨滅している。S41は花崗岩製の敲石である。欠損しているが、先端に打撃痕が見られ、全面が磨滅している。S42は花崗岩製の敲石である。全体は長三角形で、断面は平行四辺形である。先端の欠損部は欠損後も使用されたため、良く磨滅している。S43は砂岩製の扁平な円形の石器である。石鏝であろう。S44は流紋岩製の扁平な長円形の石器である。上面は磨滅している。磨石であろう。S45は砂岩製の扁平な三角形の磨石である。上下端に打撃痕が見られ、下面は特に磨滅している。S46は砂岩製の厚さ4cm程度の板状の石器である。上面は磨滅し、幅3~5mmの極浅い溝状の窪みが全面に残存している。砥石であろうか。

第4層は上層が細砂、下層が粘土で鉄分の沈着が見られることから、河道跡の湿地の様な状態で滞水していたところを、洪水砂が一気に覆った状況が伺える。

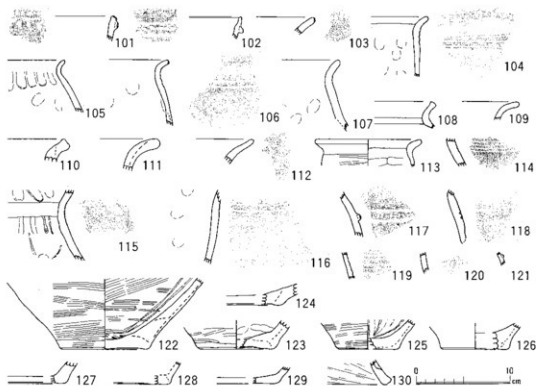


図21 第4層出土遺物実測図(1)

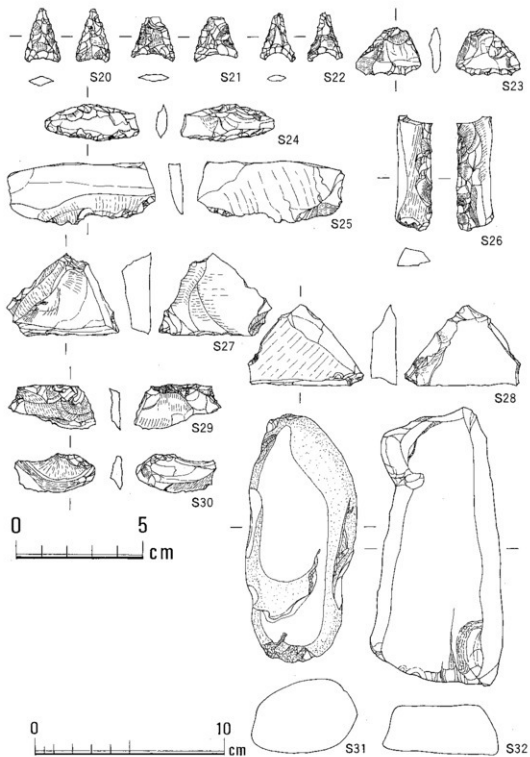


图22 第4層出土遺物実測図(2)

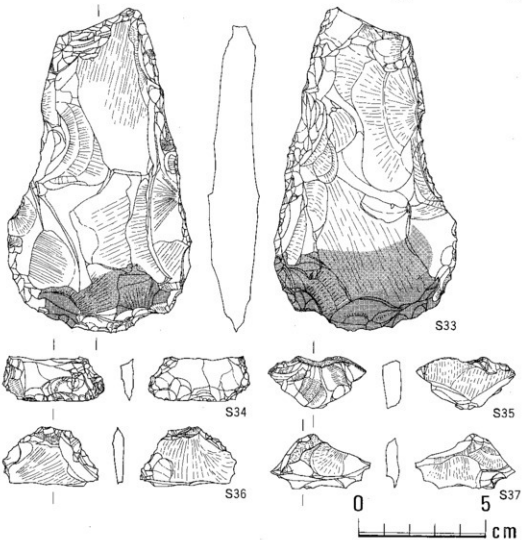
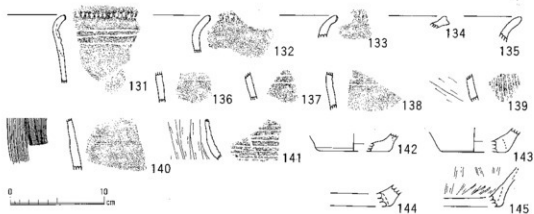


图 23 第 4 层出土遗物实测图 (3)

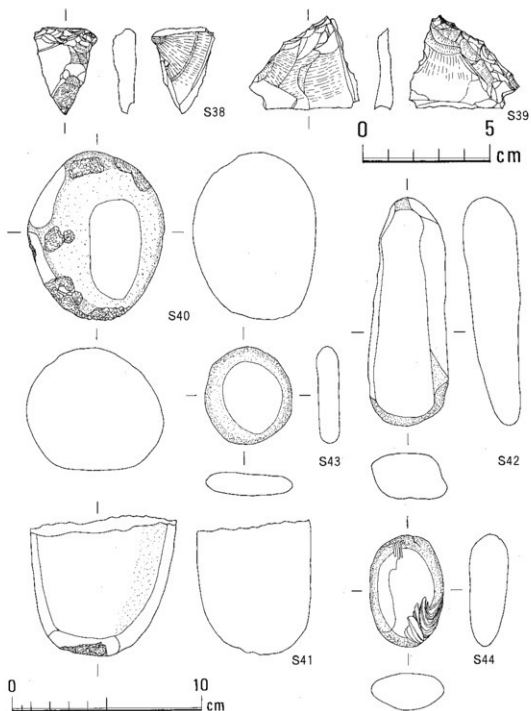


图24 第4层出土遗物实测图(4)

## 9 第4遺構面

第4遺構面は調査地南側1/3ほどで検出した。深さ約0.7mの旧河道とその北岸を検出した。検出面のレベルは岸上で32.1～32.2m、河底で31.4～31.9mである。河底は平坦であるが、西へわずかに傾斜している。

## 10 第5層

第5層は旧河道の北岸の堆積上である。河道に沿って幅1～3.5m、厚さは厚い所で約0.6mである。ほぼ中間で上層の細砂層と下層の粘質土層に分かれる。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約100g等が出土した。土器の遺存状態は比較的良い。図27～29は同層から出土したものである。下層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約200g等が出土した。下層の土器も遺存状態は良い。サヌカイト片には風化の進んだものも見られた。図30～33は同層から出土したものである。遺物の遺存状態が良いことから、河道の北側に集落が存在したのであろう。

146～152は縄文時代晩期のものである。146は鉢で、内外面ともへらみがき調整を施す。147～150は深鉢で、刻目を施した突帯を貼付ける。147～149の突帯は断面三角形である。147は突帯直下から左下方へ沈線を施す。150の突帯は断面台形である。口唇部にも刻目を施す。

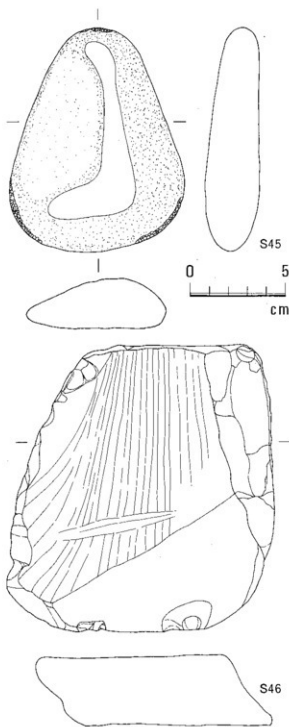


図25 第4層出土遺物実測図(5)

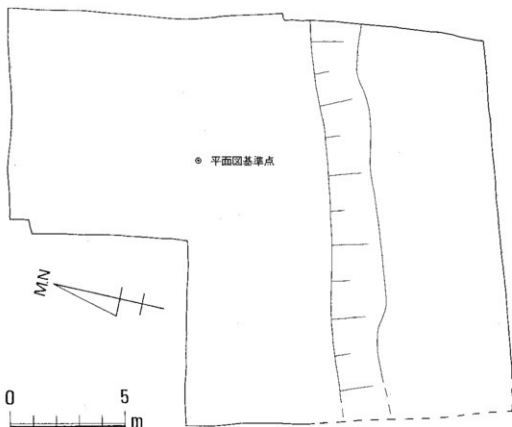


図 26 第 4 遺構面平面図

151・152は深鉢の胴部である。151は断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。152は放射状に沈線を施す。147と同一個体である。153～168は弥生土器である。153～160は甕の、161～165は壺の口縁部である。153は口唇部に刻目を施す。焼成はやや軟質である。154は口唇部に刻目を、頸部に1条の沈線を施す。外面に炭化物が付着している。155は口唇部に刻目を、頸部に3条の沈線を施す。胴部外面に煤が付着している。156は頸部に2条の沈線を施す。157は口唇部に刻目を施す。162は内外面ともへらみがき調整を施す。165は内外面ともへらみがき調整の後、頸部に沈線を施す。3条が残存している。166・167は胴部である。166は2条の沈線間を細い突帯状に浮き出し、刻目を施す。167は2条の沈線が残存している。168は蓋である。169は縄文土器の鉢の底部である。底面周囲は積み出され、上げ底である。170～185は弥生土器の底部である。170～176・181・182は壺、177・178は甕である。171の底外面には黒斑がみられる。173の内面は剝離している。177の内面には炭化物が付着している。S47はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃部を作り出している。S48はサヌカイトの剝片である。S49は凝灰岩製のやや扁平な円形の磨石である。周辺ほぼ全辺に打撃痕が見られ、上下面は磨滅している。S50は花崗岩製の扁平な磨石である。上部は欠損している。先端に打撃痕が見られる以外は全面に磨

破している。S31は砂岩製の偏平な長円形の石器である。図示していないが、下面は全面にクモの巣状にひび割れている。石錘であろう。S52は泥岩に薄く砂岩が乗る。偏平で長円形の石器である。ほぼ全面が磨滅している。石錘であろう。S53は砂岩製の楔状の石器である。長方形で横断面は台形である。上下面は磨滅している。

186~200は縄文時代晩期のものである。186・187は浅鉢である。186は端部内面に1条の沈線

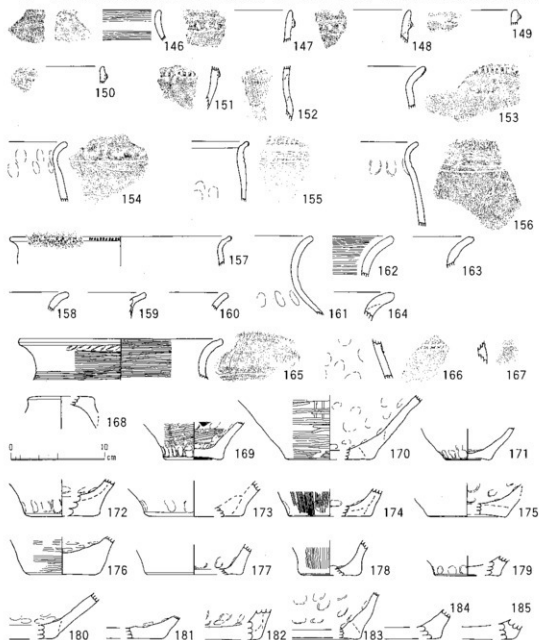


図27 第5層出土遺物実測図(1)



を施す。188～200は深鉢である。188の端部は面を成し、口唇部に刻目を施す。頭部には斜格子状の沈線文を施す。沈線は右下がりのものを後に施す。189は断面三角形の突帯を貼付け、口唇部と突帯に刻目を施す。190は押圧によって断面三角形の低い突帯を形成し、刻目を施す。突帯直下から放射状に沈線文を施す。191は断面長方形の突帯を貼付け、刻目を施す。192～194は断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。195の内面には粘土帯の接合痕が段を成して残存している。196は押圧によって断面三角形の突帯を2条形成し、刻目を施す。突帯の

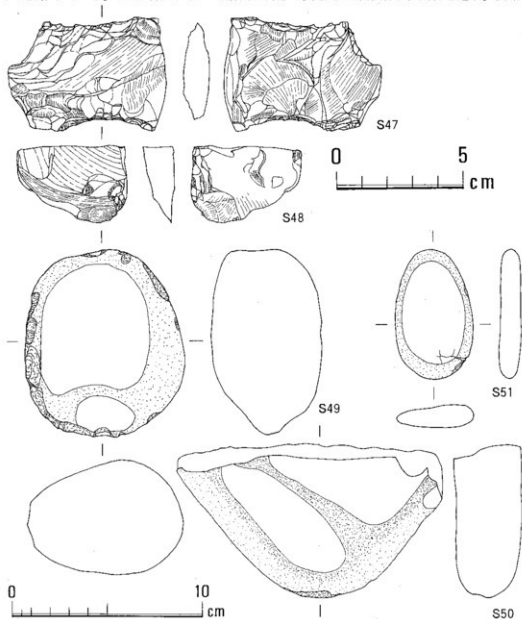
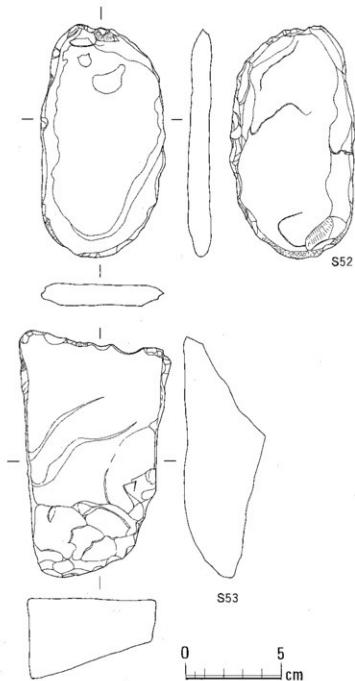


図28 第5層出土遺物実測図(2)

上下には指頭圧痕が残存している。198は縦方向に数条の細い沈線を施す。199の頸部であろうか。197～199は頸部と胴部の境に爪形文を施す。胴部には条痕が残存している。200は頸部に1条の沈線を施す。外面の所々に炭化物が付着している。201～213は弥生土器である。201は



ほぼ完形の小型壺である。作りは粗いが、へらみがき調整を施す。頸部に2条、胴部に3条の沈線を施す。黒斑も見られる。口径5.0a、底径4.2a、器高10.75aである。202は壺である。端部は面を成し、外面に刻目を施す。頸部に2条の沈線が残存している。203の外面には炭化物が付着している。205は鉢である。体部上方に1条の凹線を施し、そこより下方に炭化物、煤が付着している。焼成はやや軟質である。206・207の焼成もやや軟質である。208は壺である。頸部に2条の沈線を施す。209～211は沈線の施された胴部である。209の外面には炭化物が付着している。212・213は蓋である。212の頂面には黒斑が見られる。焼成はやや軟質である。213の頂部には剝離痕が見られることから、つまみを有していたのであろう。穿孔を施す。外面には煤が付着している。214～216は縄文土

図29 第5層出土遺物実測図(3)

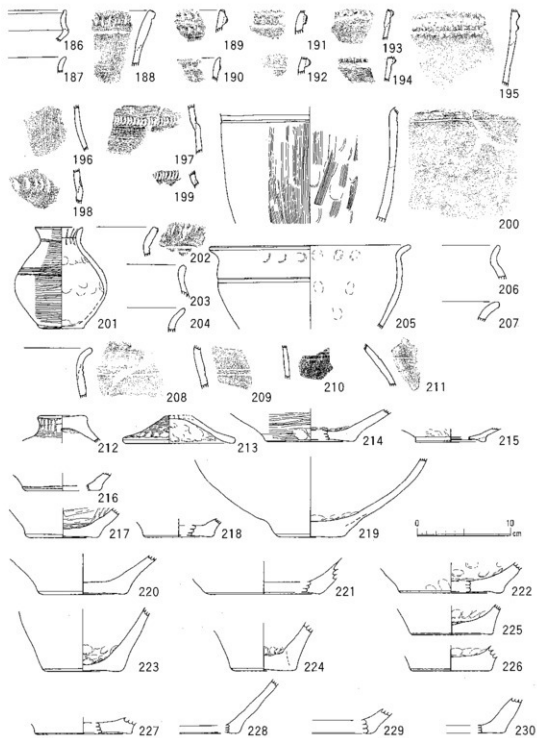


图30 第5层出土遗物实测图(4)

器の底部である。214は浅鉢である。上げ底である。215・216は鉢である。215の底面周辺は粘土を貼付け、高台状を呈する。217～230は弥生土器の底部である。217・219～222・228は帯、218・223～225は壺である。217は内面に煤が付着している。219は比較的小さな底部から胴部が球状に内湾しながら立ち上がる。220の焼成はやや軟質である。223は内面に炭化物が付着している。外面は2次焼成を受けている。225は内面に炭化物が付着している。226は底外面が暗灰色

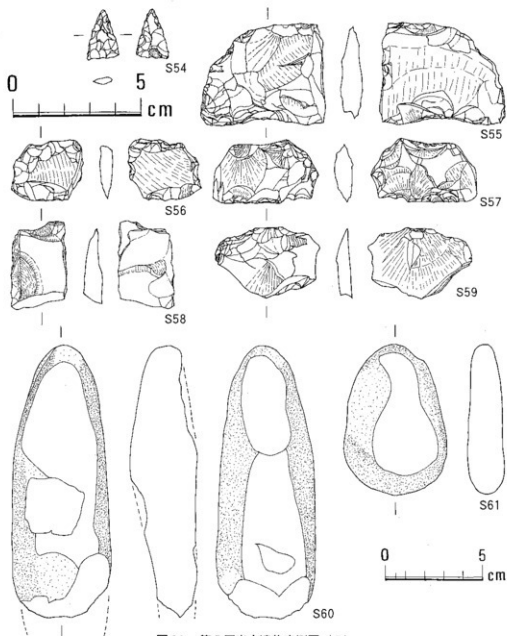


図31 第5層出土遺物実測図(5)

を呈する。煤が付着したものであろうか。228・229の焼成はやや軟質である。S54はサヌカイト製の打製石鏃である。S55はサヌカイト製のスクレイパーである。切断面以外の周辺には刃の潰れが見られる。S56・57はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃の潰れが見られる。S58・

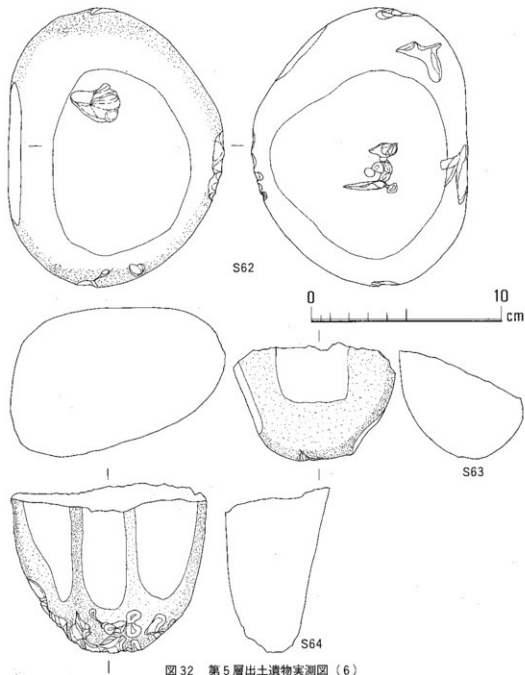


図32 第5層出土遺物実測図(6)

S9はサヌカイトの割片である。自然面が残存している。S60は砂岩製の磨製石斧である。長三角形で基部は尖る。全体に磨滅している。S61は花崗岩製の偏平な長円形の磨石である。全体に良く磨滅している。S62は花崗岩製の磨石である。四端に打撃痕が見られる。横断面は長三角形で、各面とも磨滅している。S63・64は花崗岩製の敲石である。上半は欠損している。先端に打撃痕が見られる。上下面は磨滅している。S65は花崗岩製のやや偏平な円形の磨石である。一部が欠損している。欠損部の反対側の辺に打撃痕が見られる。上下面は良く磨滅している。

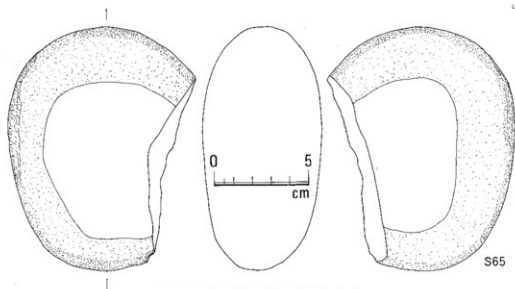


図33 第5層出土遺物実測図(7)

## 11 第5遺構面

第5遺構面は上面と同様の旧河道である。第5層を掘削した分だけ河幅が北へ広がったことになる。河岸は緩やかに傾斜している。検出面のレベルは岸上で32.0～32.2mである。流木と思われる木材が検出された。他の遺構は検出されなかった。なお、第5層掘削中に降雨により、調査地南西の壁面が崩壊した。上砂を撤去するとさらに崩壊する危険が有ったため、この部分を除いて調査を継続した。

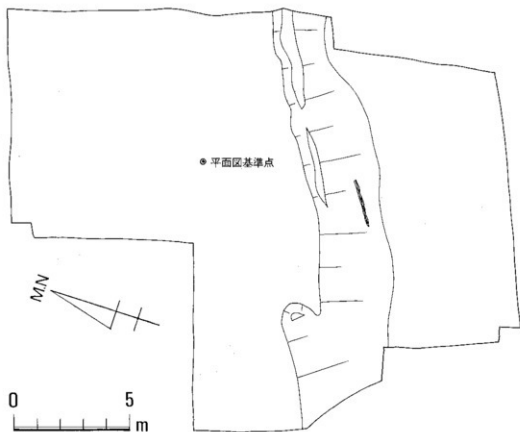


図 34 第 5 遺構面平面図

## 12 第 6 層

第 6 層は旧河道の堆積土の 3 層目である。厚い所で 0.4m 程度の細砂層である。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片 4 点、焼土塊 350g が出土したが、出土量は少なく、小片ばかりである。

231・232 は縄文時代晩期の浅鉢である。233 は断面三角形の突帯が貼付けられた口縁部である。焼成が軟質のため、磨滅が著しい。234 は縄文時代晩期の深鉢である。断面三角形の突帯が貼付けられ、11 唇部と突帯に刻目を施す。S66・67 はサヌカイトの剝片である。S66 は自然面が残存している。

第 6 層も、第 2 層下層、第 4 層上層と同様に洪水によって形成されたものであろう。



図 35 第 6 層出土遺物実測図

### 13 第 6 遺構面

第 6 遺構面は第 6 層を掘削したことで旧河道が北へ 1.5~2.5m 拡幅し、河底も深くなった。河岸は 1 段の段を挟んで緩やかに傾斜している。これより下面では旧河道内堆積土のみを掘削するため、河道の岸肩の位置は変わらない。他の遺構は検出されなかった。

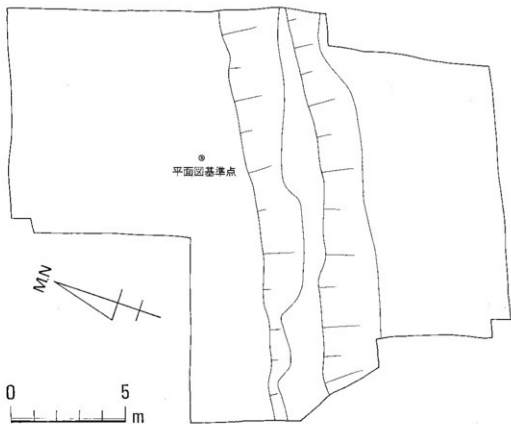


図 36 第 6 遺構面平面図



## 14 第7層

第7層は旧河道内堆積の4層目である。厚い所で0.3m程度の粘質土層である。木片を少量含む。

整理箱半箱程度の縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約180g等が出土した。状態の良いものが多い。

235・236は縄文時代晩期の壺である。235は屈曲して外反する小さな口縁部から大きく広がる胴部をもつ。肩部に緩い段がある。胴部に細い1条の沈線を施す。236はやや外反しながら直立する口縁部から球状の胴部をもつようである。口縁部は内面に1条の沈線を施し、内側へ玉縁状に肥大する。胴部には条痕が残存している。口縁部外面には煤が、胴部外面には炭化物が付着している。237～240は弥生時代前期の甕である。口唇部に刻目を施す。237の端部は面を成す。胴部上方に1条の凹線を施す。外面に炭化物が付着している。238は頸部に1条の凹線が見られる。外面に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。241～243は縄文時代晩期の浅鉢である。243の端部は左右非対象の山形小突起をもつ。下部には焼成前に内側から穿孔を施す。内面には左回りに2条の凹線を施し、凹線間は突帯状を呈する。244～252は縄文時代晩期の深鉢である。244～246の端部は面を成す。凹線を施すことで端部を強調している。突帯を意識しているのであろうか。244の端部では粘土を外側に折り返して肥大させているのが観察出来る。口唇部に刻目を、頸部に斜格子状の沈線文を施す。沈線は右下がりのものを後に施文する。247の端部は面を成し、刻目を施す。外面に炭化物が付着している。248の端部は面を成し、刻目を施す。この破片内で施文方向が変わっている。押圧によって断面台形の突帯を形成し、刻目を施す。頸部には左下方向へ4条一組の沈線文を施す。焼成はやや軟質である。249の端部は肥大して面を成し、刻目を施す。断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。頸部下半に貝殻によって格子状の押形文を施す。250の端部は小さな面を成し、浅い刻目を施す。外面の条痕は比較的丁寧である。文様を意識しているのであろうか。外面に炭化物が付着している。251の頸部と胴部の境は段を成す。胴部の器壁はへらけずり調整によって薄く仕上げられている。頸部最下辺に爪形状工具を>状に2段に押し付けて、より大きな爪形状の施文を施す。下段を後に施文する。外面に炭化物が付着しているが、胴部の方が厚く付着している。252も251と同様の施文が見られるが、252の工具の方が直線的で、上段を後に施文する。

253～257は弥生土器である。253は甕である。頸部に低い突帯を削り出し、口唇部と突帯に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。254は小型の壺であろうか。端部は折り曲げて外下方に拡張している。頸部に1cm幅に7条程度の多条沈線文を施す。焼成はやや軟質である。255・256は甕である。255の端部はやや拡張し、逆三角形のスタンプ文を施

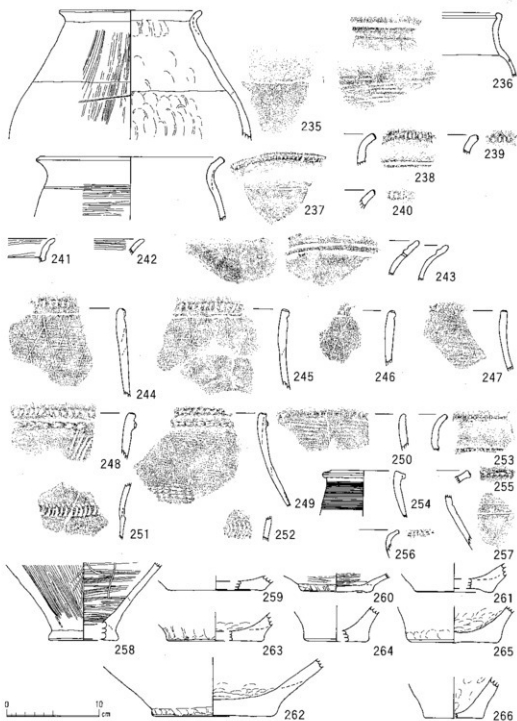


图 37 第 7 层出土遗物实测图 (1)

す。焼成はやや軟質である。256の口唇部は刻目を施すが、押圧のため、粘土が下方に飛び出している。外面に炭化物が付着している。257は壺である。2条の沈線を施す。外面に炭化物が付着している。258～262は縄文土器の底部である。258・259は浅鉢である。258は底外面にもへらみがき調整を施す。やや上げ底である。259の焼成はやや軟質である。260・261は鉢である。底面周辺は高台状に突出し、上げ底である。262は深鉢である。外面に煤が、内面に炭化物が付着している。263～266は弥生土器の底部であろう。264の内面には炭化物が付着している。265は成形時の圧痕が残存し、不安定である。内外面に炭化物が付着している。266は内外面に炭化物が付着している。S68・69はサヌカイト製のスクレイパーである。S68の図上で左角はやや磨滅している。S69の下辺には刃の潰れが見られる。S70はサヌカイト製の楔形石器である。

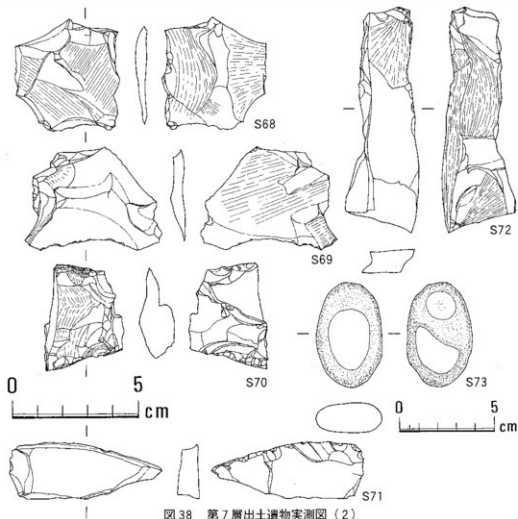


図38 第7層出土遺物実測図(2)

上下辺に刃の潰れが見られる。S71・72はサヌカイトの割片である。S72は自然面が残存している。S73は偏平な長円形の磨石である。全面に良く磨滅している。砂岩製であろう。

## 15 第7遺構面

第7遺構面は上面と同様に、第7層を掘削したことで旧河道が深くなった。長さ7.3mのものをはじめ、流木を検出した。河底は船底状を呈する。検出面のレベルは、河道中央で31.0～31.1mである。西へわずかに傾斜している。他の遺構は検出されなかった。

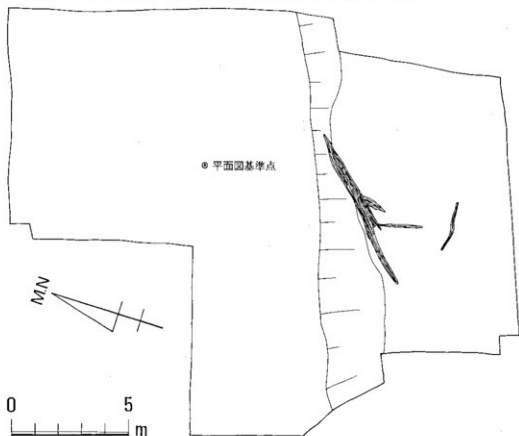


図39 第7遺構面平面図

## 16 第8層

第8層は旧河道内堆積の5層目である。厚さ0.1m程度の粘質土層である。木片を少量含む。縄文土器、弥生土器の小片14点、サヌカイト片等が出土したが、図示出来たものはわずかである。

267は底部である。表面磨滅のため詳細は不明である。縄文土器であろうか。S74はサヌカイ

ト製のスクレイパーである。下辺に刃部調整を施す。自然面が残存している。S73はサヌカイトの剝片である。S74はサヌカイト製の打製石鏃である。長台形を呈する。下面はほとんど剝離しているが、残存部は全面が磨滅している。

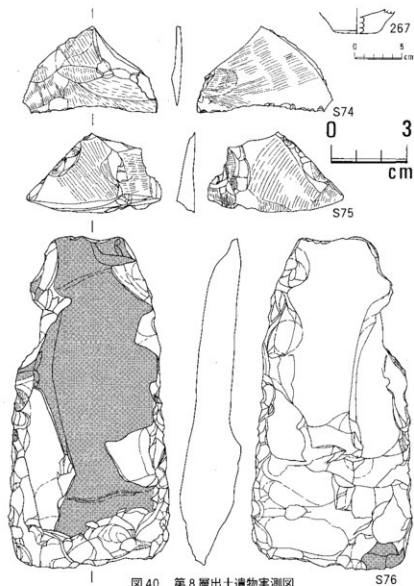


図40 第8層出土遺物実測図

S76

## 17 第8遺構面

第8遺構面は上面と同様に、第8層を掘削したことで旧河道が深くなった。長さ5.2mのものをはじめ、流木を検出した。河底は船底状を呈する。西へ傾斜している。流木の先端が東を向くことから、流水方向が西であることが伺える。

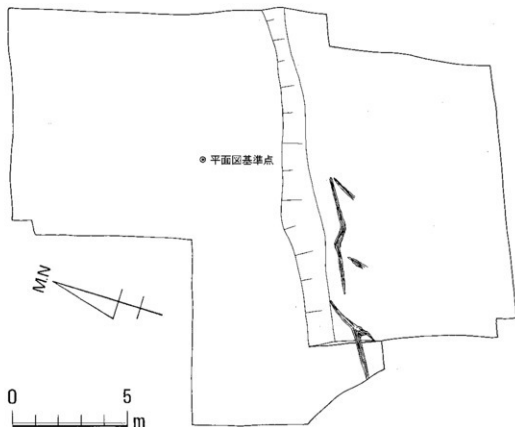


図41 第8遺構面平面図

## 18 第9層

第9層は旧河道内堆積の6層目の厚さ0.1~0.2mの粘質土層と、その下層の厚さ0.1m程度の腐植土層である。両層とも多数の流木を含み、最大のもので径0.3mにもなる。これらを掘削したところ、旧河道の中央で幅2.5~3m、厚さ0.2m程度の木片を含む砂層を検出した。粘質土層と腐植土層を上層、砂層を下層とした。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土した。出土量は少ないが、状態は良いことから、近隣に集落が存在したのであろう。図42・43は同層から出土したものである。下層からは縄文土器等が出土した。図44で図示したものが全てである。

268～281は縄文土器である。268は球状の体部の鉢であろう。外面に2条の凹線を施す。凹線間を突帯状に浮き出させ、縄文を施し、1列の刺突文を施す。さらに、縄文帯から口唇部へ断面方形の突帯を貼付け、刺突文を施す。破片の下辺にも1条の凹線が見られる。口縁は細かい間隔で小さい山形突帯をもつ波状口縁のようである。後期のものであろう。269は中世の播鉢状の浅鉢であろう。端部は下方に拡張され、面を成す。端面に施文は見られない。外面には条痕を消すように粗くへらみがき調整を施す。後期のものであろうか。270～281は晩期のものである。270はほぼ完形の鉢である。半球状の胴部に大きく開く口縁部をもつ。成形、調整は粗く、口縁部は波打ち、指頭圧痕が残存している。端部はわずかに内側へ玉縁状に肥大している。内外面に炭化物が付着している。口径21.0a、器高11.15aを測る。271～274は浅鉢である。271はやや内弯する胴部に大きく外反する口縁部をもつ。口縁は5ヶ所の突起をもつ波状口縁である。端部は外側へ肥大している。内外面ともへらみがき調整で仕上げ、口縁部外面に朱彩（網点部）を施す。272の端部は内側へ肥大している。波状口縁である。273の端部は内側へ突帯状に粘土を貼付け、玉縁状を呈する。274の端部は押圧によって内側へ玉縁状に肥大している。275～281は深鉢である。275は緩やかに外反する口縁部をもつ。端部は面を成し、刻目を施す。頸部下辺に筥状工具で押形文を施す。口縁部外面に炭化物が付着している。276の端部は面を成す。端部外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口唇部と突帯に刻目を施す。頸部下辺に爪形文状の押形文を施す。条痕が明瞭に残存している。277は内弯する口縁部である。端部はわずかに面を成す。端部外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口唇部と突帯に細い刻目を施す。突帯下方に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。278の端部はわずかに面を成す。端部から下がった所に断面長三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。279の端部は面を成す。端部から下がった所に、押圧によって断面三角形の低い突帯を形成する。口唇部と突帯に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。280の端部はわずかに面を成す。端部内面にほぼ等間隔に粘土を塗り出して突起を形成する。刻目を意識しているのであろうか。頸部下辺に爪形文と思われる施文を施す。外面に炭化物が付着している。281の器壁は薄く、口唇部に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。282・283は弥生土器の底部である。282は壺である。焼成はやや軟質である。283は甕である。内面に炭化物が付着している。377・38はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃の潰れが見られる。379・80はサヌカイトの剝片である。379は自然面が残存している。381は花崗岩製の石皿である。ほとんどの面が磨滅しているが、上面は特に良く磨滅し窪みを成す。この他にサヌカイトの石核が出土した。重さ274gを測る。

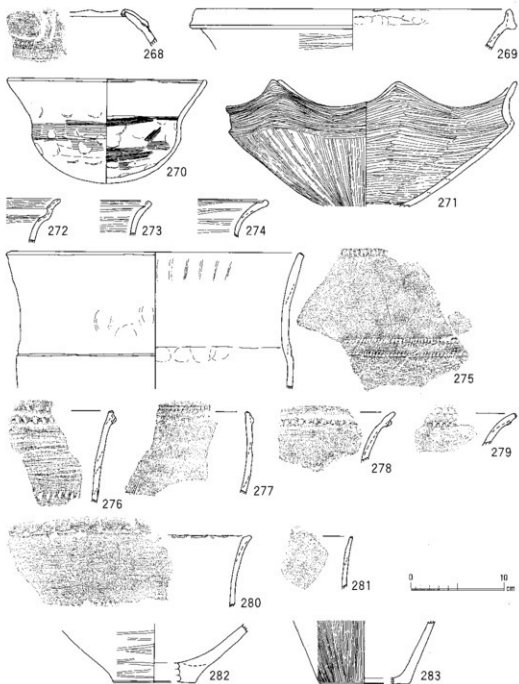


图42 第9層出土遺物実測図(1)



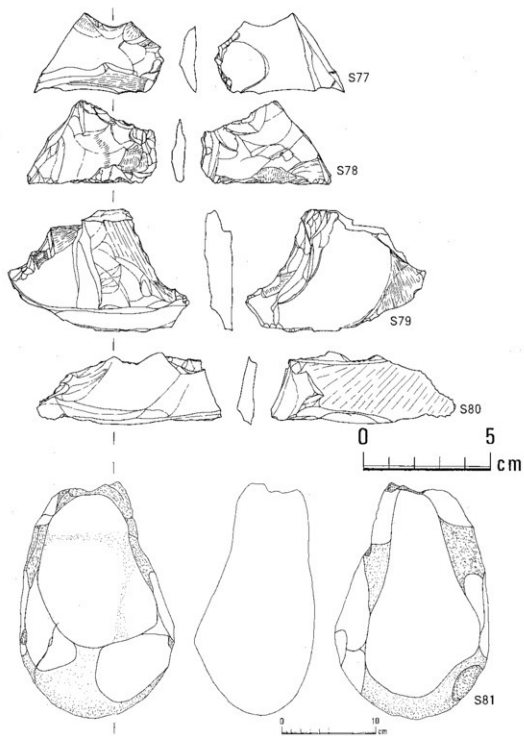


图43 第9层出土遗物实测图(2)

284・285は縄文土器である。284の外表面には施文を施す。煤が吸着し、褐色を呈する。285は浅鉢の胴部である。内外面ともへらみがき調整を施す。煤が吸着し、褐色を呈する。S82は花崗岩製の扁平な長円形の磨石である。上下端に打撃痕が見られ、全面が磨滅している。

第9層下層の砂層は、旧河道の中央の細い窪みに、強い流勢で形成されたのであろう。やがて窪みも埋没し、流勢も穏やかになり、落葉や粘土が堆積し上層を形成したのであろう。

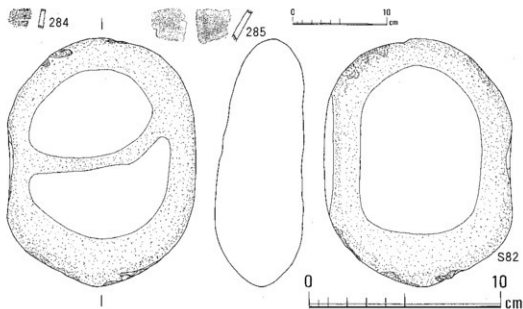


図44 第9層出土遺物実測図(3)

## 19 第9(最終)遺構面

第9遺構面は旧河道の河底である。河底は船底状を呈し、緩やかに傾斜している。前節で述べた様に、中央で検出した砂層を掘削したため、河底の中央はさらに一段落ち込む。最深部のレベルは30.3~30.4mである。西へ傾斜している。他の遺構は検出されなかった。

河底をさらに約1m下、29.4mまで掘削した。厚さ0.1m程度の砂層と腐植土層の互層が見られた。遺物は出土しなかったため、この第9遺構面を最終面とし調査を終了した。

※ 縄文土器について山本悦世氏(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)からご教示を頂いた。

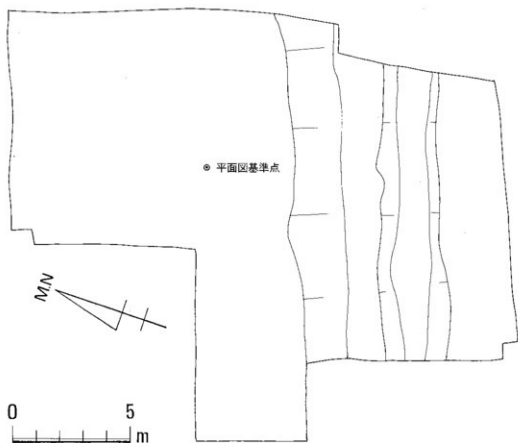


图45 第9(最終)遺構面平面图

## IV まとめ

前章で検出した遺構、遺物について述べた。ここでこれらをまとめてみたい。

まず、層序関係をまとめると図46ようになる。

それでは時代を遡って、調査地の変遷を見てみたい。

### 縄文時代後期以前

縄文時代後期に位置付けられる土器片268・269が第9層から出土した。備前原遺跡の歴史はこの時期まで遡れる。これより以前は遺物が出土しないことから、調査地周辺では人跡は見られなかったであろう。

### 縄文時代晩期～弥生時代前期

第9～7遺構面の時代である。第9層上層～第7層は腐植土層、粘質土層であることから、河道は安定していたのであろう。第9層上層、第7層から縄文時代晩期の遺物がまとまって出土した。土器片は比較的大きなものが多く、遺存状態も良いことから、近隣に集落が営まれて

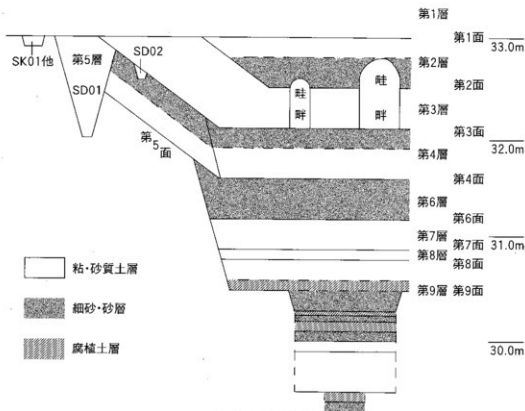


図46 層序模式図

いたのであろう。

#### 弥生時代前期

第6遺構面の時代である。第6層の細砂層を形成する洪水が発生している。

#### 弥生時代中期前葉

第4遺構面の時代である。河道は第4層下層の粘土層を形成するほど穏やかであったのであろうが、その後、第4層上層の細砂層を形成する洪水が発生している。

#### 弥生時代中期中葉～後葉

第3遺構面の時代である。調査地に人為的な手が加わり、SD01・02が掘削される。調査範囲内では、この時期のみ溝は東流していたようである。

#### 弥生時代後期

第2遺構面の時代である。河道は埋没し、湿地と化していたのであろう。第3層の粘質土層を耕作土に水田として利用されている。

#### 弥生時代後期終末期

河道は埋没したとは言え、不安定であったようで、第2遺構面の水田は第2層下層の細砂層を形成する洪水に襲われている。

#### 古墳時代以降

第1遺構面の時代である。河道は完全に埋没し、調査地内は同レベルとなるが、積極的に利用された様相は伺えない。現在に至るまで水田として利用されていたのであろう。

#### 縄文時代晩期深鉢について

前述のように第9層上層、第7層からこの時期の土器がまとまって出土した。それらのうち、深鉢について見てみたい。

口縁部に着目すると、突帯の有無で二分される。さらに、突帯をもつものは、その位置が端部より下方のもの(248・249・278・279)と端部直下のもの(276・277)に分けられる。突帯をもたないものは、端部が尖るもの(250・280・281)と方形で面を成すもの(244～247・275)に分けられる。いずれも口唇部に刻目を施す。280は刻目は施されていないが、端部内側の摘み出された突起は刻目を意識していると考えられる。近隣の遺跡の調査結果から、これらは端部が尖るもの→端部が方形のもの→突帯が下方のもの→突帯が端部直下のものと新しくなる。これらのうち244～247は鎌木氏らの報告<sup>2)</sup>で一類とされ、『かなり多量に発見された特異』なものに該当しよう。今回の調査で出土した縄文時代晩期の上器は原下層式土器を含む、晩期中葉後半から後葉のものである。

1) 平井泰男 「縄文時代晩期の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 窪木遺跡1』(1997)

2) 鎌木義昌・江坂進 「岡山縣御津町原遺跡」『瀬戸内考古学2』(1958)

## 土器観察表

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
1	甕	16.4	よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫	明灰黄	暗灰茶	
2	甕	14.6	よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫少	白灰茶	白灰茶	加酸2条
3	甕	11.1	よこなで	よこなで へらけずり	3mm以下細礫	暗灰肌	肌灰	
4	甕		よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫	淡灰橙	暗灰橙	
5	甕		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒少	淡橙	灰橙	焼成軟
6	甕	14.9	よこなで	よこなで へらけずり	0.5mm以下細礫	白灰茶	黄灰	沈澱9条 煤付着
7	壺		なで へらみがき	なで へらみがき	0.5-3mm細礫極少	明赤茶	赤茶	丹塗り
8	甕		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗灰肌	肌灰	沈澱3条残存
9	甕		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗灰肌	灰茶	沈澱5条残存
10	甕		よこなで	よこなで	1mm以下砂粒	肌灰	暗黄灰	沈澱6条
11	甕		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
12	甕		よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫少	暗灰茶	灰肌	沈澱4条 煤付着
13	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5mm以下砂粒	灰肌	暗茶灰	沈澱6条残存
14	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5mm以下砂粒	灰肌	黄灰	沈澱7条
15	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5mm以下砂粒	肌灰	淡灰肌	沈澱9条
16	甕		よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫	暗灰肌	黒	沈澱5条残存
17	壺		よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫	暗灰肌	暗灰灰	
18	壺		よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫	暗茶	淡茶灰	
19	壺		よこなで	よこなで	1mm以下細礫極少	明茶	明茶	丹塗り
20	壺		よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫	明肌灰	淡茶灰	
21	碗		不明	不明	0.5-1mm細礫	明赤茶	明赤茶	丹塗り
22	壺	7.3	よこなで	よこなで へらけずり	0.5-2mm細礫少	淡灰橙	灰肌	
23	壺		不明	不明	0.5-1mm砂粒少	暗灰肌	淡灰茶	
24	甕	5.0	不明	なで	0.5-5mm細礫	暗橙	灰	丹塗り
25	甕	7.5	不明	不明	0.5-2mm細礫	灰橙	灰橙	
26	壺	7.4	なで	剥離	0.5-2mm細礫	灰肌		
27	壺	8.0	なで	なで	0.5mm以下砂粒	黄灰	淡灰茶	
28	高杯		不明	不明	0.5mm以下砂粒極少	暗灰肌	淡灰褐	
29	高杯		よこなで はけめ	なで	0.5-1mm砂粒少	灰肌	白肌灰	
30	高杯		不明	無調整 不明	0.5-2mm細礫	灰橙	淡灰褐	
31	高杯		へらみがき	無調整 なで	0.5mm以下砂粒極少	灰橙	白肌灰	
32	高杯		へらみがき よこなで	なで よこなで	2mm以下細礫	淡褐灰	暗灰茶	
33	高杯		不明	不明	0.5-2mm細礫極少	白灰肌	淡茶灰	
34	高杯		へらみがき なで	はけめ なで	0.5mm以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
35	高杯		なで	無調整 なで	0.5-3mm細礫	暗灰肌	淡灰茶	
36	碗	5.7	よこなで なで	なで	0.5-1mm細礫極少	淡橙	黒(煤)	黒色土器人類
37	壺	21.6	よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫極少	灰茶	灰茶	丹塗り
38	甕	12.1	よこなで	よこなで へらけずり	1mm以下細礫	淡灰茶	灰肌	沈澱3条 炭化物付着
39	甕	15.0	よこなで	よこなで へらけずり	0.5-2mm細礫	暗茶	肌灰	沈澱8条 炭化物付着
40	甕	16.3	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗灰肌	灰肌	沈澱6条残存
41	甕		よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫	淡灰橙	灰肌	
42	壺		よこなで	よこなで	0.5-3mm細礫	灰肌	灰肌	
43	壺	22.0	へらけずり	へらみがき へらけずり	0.5mm以下砂粒	暗茶灰	暗灰肌	
44	壺		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗黄灰	暗灰	
45	壺		へらみがき	なで へらけずり	0.5-2mm細礫少	赤茶	肌灰	丹塗り
46	壺	26.6	よこなで	よこなで へらけずり	0.5-3mm細礫	灰肌	淡灰褐	煤付着
47	壺	9.2	よこなで	よこなで へらけずり	0.5mm以下砂粒	灰褐	淡灰茶	
48	碗	13.8	よこなで へらみがき	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	明赤茶	灰黄	丹塗り?
49	碗		なで	なで	0.5mm以下砂粒多	灰橙	灰肌	丹塗り?
50	甕		よこなで たたき	なで	0.5-2mm細礫	淡灰肌	黄灰	2次焼成

番号	器種	口径 底径	外側調整	内面調整	胎土		備考		
					色	調			
51	壺	2.0	なで	なで	0.5mm以下砂粒極少	灰橙	橙灰		
52	高杯		へらみがき	なで	0.5-3mm細礫	明灰茶	淡茶灰	丹塗り	
53	高杯		へらみがき	なで	0.5-2mm細礫少	赤茶	灰肌	丹塗り	
54	壺		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	灰肌	灰肌	内線2条	
55	盃		不明	不明	0.5-2mm細礫多	灰橙	灰橙		
56	鉢		はけめ	よこなで	へらけずり	0.5-1mm細礫少	淡肌灰	白灰	
57	鉢		よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫	赤茶	赤茶	丹塗り	
58	壺		不明	不明	0.5-3mm細礫	淡肌	白灰肌	内線2条残存	
59	壺		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	白橙	白橙		
60	壺	16.4	よこなで	よこなで	0.5-1mm細礫少	肌灰	淡灰橙	沈線6条	
61	壺	16.2	なで はけめ みがき	よこなで	けらけずり	0.5-1mm砂粒	肌灰	茶褐	沈線6条 炭化物付着
62	壺	13.2	はけめ	へらけずり		0.5-8mm細礫	橙灰	淡橙灰	
63	壺	6.5	はけめ	へらけずり		2mm以下細礫	暗赤茶	肌灰	丹塗り 黒斑
64	壺		不明	不明		0.5-2mm細礫	明灰橙	白灰	
65	壺		不明	不明		0.5mm以下砂粒	淡灰茶	橙	内面炭化物付着
66	壺		不明 はけめ	へらけずり		0.5-1mm細礫少	淡灰橙	暗灰	底外面黒色
67	壺		へらみがき	へらみがき		1mm以下細礫少	暗灰肌	肌灰	口直さ?
68	高杯		へらみがき	へらみがき		0.5-2mm細礫極少	灰肌	暗灰肌	
69	高杯		不明	不明		0.5-1mm細礫極少	白橙	灰茶	
70	高杯	10.5	はけめ よこなで	よこなで		1mm以下砂粒極少	赤茶	暗黄灰	丹塗り
71	高杯	16.9	へらみがき よこなで	よこなで		1-2mm細礫極少	明茶	明茶	丹塗り
72	鉢	4.6	なで	なで		0.5-5mm細礫	暗赤茶	暗黄灰	丹塗り
73	壺		よこなで	よこなで		0.5mm以下砂粒極少	淡灰橙	白灰肌	
74	壺		よこなで	へらみがき	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	灰肌	灰肌	
75	深鉢		よこなで	なで		0.5mm以下砂粒極少	白肌	白灰肌	刻目突帯 縄文土器?
76	壺		よこなで	よこなで	へらけずり	0.5mm以下砂粒	白肌灰	白灰茶	内線1条残存
77	高杯	15.7	へらみがき	へらみがき		0.5mm以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
78	壺		よこなで	よこなで		0.5mm以下砂粒少	茶灰	灰橙	
79	盃		不明	不明		0.5-3mm細礫	茶灰	茶灰	
80	深鉢		よこなで	なで		2mm以下細礫少	淡灰肌	淡灰橙	刻目突帯 縄文土器?
81	鉢?		不明	不明		0.5mm以下砂粒極少	淡灰肌	淡灰肌	内面内線1条残存
82	壺		よこなで	よこなで		0.5-2mm細礫少	灰橙	灰黄	刻目? 沈線2条
83	壺		不明	不明		0.5-2mm細礫少	暗灰肌	白灰	沈線4条残存
84	口縁		不明	不明		1mm以下砂粒多	暗灰茶	暗灰橙	
85	鉢		へらみがき	へらみがき		0.5-2mm細礫	暗茶	黒灰	縄文土器
86	蓋	5.4	不明	不明		2mm以下細礫	白灰肌	白灰肌	
87	壺	18.9	よこなで 不明	よこなで 不明		2mm以下細礫少	灰橙	灰橙	沈線? 2条残存
88	壺	18.4	よこなで 不明	よこなで 不明		0.5-2mm細礫少	灰橙	淡灰橙	沈線? 2条残存
89	底部		不明	割離		2mm以下細礫	白灰肌	白灰肌	
90	深鉢		なで	なで		0.5mm以下砂粒	淡茶灰	淡灰橙	口唇刻目 刻目突帯
91	浅鉢		なで	なで		1mm以下砂粒	淡灰橙	暗灰	
92	壺		へらみがき	へらみがき		0.5-2mm細礫多	暗灰茶	橙	
93	盃		なで	なで		0.5-2mm細礫少	灰肌	白灰灰	沈線2条 炭化物付着
94	壺		なで	なで		0.5-2mm細礫	淡灰茶	淡灰橙	沈線3条 丹塗り?
95	壺	9.1	へらみがき	なで	なで	0.5-2mm細礫少	淡灰肌	灰茶	
96	壺	6.8	なで	なで		0.5-1mm細礫少	黄灰	灰肌	
97	底部		不明	へらみがき?		0.5-3mm細礫	暗赤茶	灰橙	
98	壺		不明	不明		0.5-2mm細礫多	灰橙	淡灰橙	
99	壺		よこなで	へらみがき	よこなで	0.5-1mm細礫少	茶灰	白灰茶	口唇刻目 炭付着
100	壺		へらみがき	不明		0.5-1mm細礫	灰茶	肌灰	沈線2条残存

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
101	深鉢		よこなで	よこなで	0.5-2mm細砂多	灰褐	淡灰褐	口唇刻目 刻目突帯
102	深鉢		よこなで	よこなで	0.5-1mm細砂	淡灰橙	灰肌	刻目突帯
103	甕		不明	不明	0.5-2mm細砂多	暗茶	灰橙	口唇刻目
104	甕		よこなで へらみがき	なで	0.5-2mm細砂	明灰茶	灰橙	口唇刻目 沈線3条
105	壺		不明	不明 なで	0.5-2mm細砂少	白灰肌	灰肌	
106	甕		よこなで へらみがき	なで	0.5-2mm細砂	淡灰橙	白灰茶	口唇刻目 沈線2条
107	甕		不明	不明	0.5-2mm細砂	白灰肌	白灰肌	
108	甕		よこなで	不明	0.5mm以下砂粒極少	淡灰黄	淡灰黄	
109	口鉢		不明	不明	0.5-3mm細砂	灰褐	白灰肌	
110	壺		よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	灰褐	黒褐	
111	壺		よこなで	不明	0.5-2mm細砂多	白灰橙	白灰橙	
112	口鉢		不明	へらみがき	0.5-2mm細砂	暗褐	灰茶	口唇刻目
113	壺	10.9	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5mm以下砂粒極少	淡灰茶	淡灰茶	
114	壺		へらみがき	なで	0.5-3mm細砂	暗茶灰	茶灰	沈線4条残存
115	壺		不明	不明	0.5-1mm細砂少	灰肌	淡灰橙	沈線7条
116	壺		へらみがき	なで	1mm以下細砂少	灰橙	白灰肌	沈線2条残存
117	壺		へらみがき	なで	0.5-2mm細砂	灰肌	暗灰肌	刻目突帯
118	甕		へらみがき	よこなで なで	3mm以下砂粒	灰肌	黄灰	沈線3条 刺突文2条
119	甕		不明	不明	0.5-2mm細砂	明灰肌	淡灰茶	沈線5条残存
120			不明	不明	0.5-3mm細砂多	暗灰茶	黄灰	縦方向沈線7条残存
121			不明	不明	0.5-2mm細砂	明灰橙	暗橙灰	突帯 棱状紋
122	浅鉢	8.7	へらみがき 無調整	へらみがき	0.5-2mm細砂	灰肌	黒灰	
123	鉢	7.5	へらみがき 無調整	なで	0.5-3mm細砂多	灰肌	茶灰	
124	底部		けずり?	なで	0.5-3mm細砂多	淡灰褐	白灰茶	
125	壺	5.7	へらみがき 無調整	なで	0.5mm以下砂粒	灰茶	淡灰褐	
126	壺		不明	なで	0.5-2mm細砂多	淡灰褐	白茶	
127	底部		不明	不明	0.5-2mm細砂多	淡灰橙	白黄灰	
128	底部		へらみがき 無調整	新離	0.5-2mm細砂	茶灰		
129	甕		へらみがき なで	なで	0.5mm以下砂粒	淡灰橙	灰肌	
130	高杯		へらみがき よこなで	へらけずり よこなで	1mm以下砂粒	灰肌	灰肌	矢羽状凸かし
131	甕		不明	不明	0.5-1mm細砂多	淡灰茶	白灰茶	口唇刻目 沈線2条
132	甕		不明	不明	0.5-3mm細砂	淡茶灰	白灰肌	口唇刻目
133	甕		なで	不明	1mm細砂少	灰褐	灰茶	口唇刻目
134	甕		よこなで	よこなで	0.5-2mm細砂少	灰茶	白灰茶	煤付着
135	口鉢		不明	不明	1mm以下細砂	灰肌	灰肌	
136	甕		へらみがき	なで	0.5-3mm細砂	茶灰	白灰茶	沈線1条残存
137	甕		へらみがき	なで	0.5-1mm細砂少	灰肌	暗灰	沈線2条残存
138	甕		へらみがき	なで	0.5-2mm細砂少	灰橙	黒灰	沈線2条
139			不明	へらけずり	0.5-2mm細砂	淡灰茶	灰黄	縦方向沈線9条残存
140	壺		へらみがき	はけめ	0.5mm砂粒	暗褐	黒灰	内面炭化物付着
141	壺		へらみがき	へらけずり	0.5mm砂粒	淡灰橙	淡茶灰	沈線8条残存
142	底部	7.4	なで	なで	0.5-3mm細砂	暗灰肌	白灰黄	
143	底部	6.5	不明	不明	0.5-3mm白色細砂	茶灰	灰茶	
144	底部		不明	不明	0.5-1mm細砂少	白灰黄	黒	
145	甕		へらみがき	へらけずり	0.5-4mm細砂	灰橙	暗黄灰	
146	鉢		へらみがき	へらみがき	0.5-1mm細砂	暗褐	暗褐	
147	深鉢		不明	不明	0.5-4mm細砂多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯 沈線
148	深鉢		よこなで	不明	0.5-2mm細砂多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯
149	深鉢		不明	不明	0.5-2mm細砂多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯
150	深鉢		不明	不明	0.5-2mm細砂少	白黄灰	白黄灰	口唇刻目 刻目突帯



番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
151	深鉢		よこなで 不明	不明	0.5-5mm細礫多	白灰肌	茶灰	刻目突帯
152	深鉢		へらみがき 不明	不明	0.5-3mm細礫多	淡灰茶	淡灰茶	縦方向沈線 147 同一個体
153	甕		不明	不明	0.5-3mm細礫多	灰褐	白灰肌	口唇刻目 焼成軟
154	甕		はけめ	なで	0.5-5mm細礫	褐	灰肌	刻目 沈線 1条 炭化物
155	甕		よこなで はけめ	よこなで 不明	0.5-2mm細礫	茶灰	淡茶灰	刻目 沈線 3条 炭付着
156	甕		よこなで 不明	よこなで 不明	0.5-2mm細礫	白燈灰	白灰茶	沈線 2条
157	甕	23.1	不明	不明	0.5-2mm細礫多	暗燈灰	淡灰褐	口唇刻目
158	甕		よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫	淡灰肌	白灰肌	
159	甕		不明	不明	0.5-1mm細礫多	淡灰褐	白灰肌	
160	甕		不明	不明	0.5-1mm細礫	灰肌	白灰肌	
161	壺		不明	不明	0.5-3mm細礫多	灰燈	灰肌	
162	壺		へらみがき	へらみがき	0.5-8mm細礫少	暗茶	淡灰茶	
163	壺		不明	不明	0.5-3mm細礫多	暗灰燈	暗茶灰	
164	壺		不明	不明	0.5-2mm細礫	淡灰褐	淡灰褐	
165	壺	21.2	へらみがき	へらみがき	0.5-1mm細礫	褐	灰燈	沈線 3条残存
166			なで はけめ	なで	0.5-2mm細礫	暗褐	暗灰	刻目 沈線 2条
167			へらみがき	不明	0.5mm以下砂粒少	灰燈	白灰黄	沈線 2条残存
168	蓋	6.4	不明	不明	0.5-3mm粗礫	灰燈	白灰茶	
169	鉢	5.7	へらみがき	へらみがき なで	0.5-2mm細礫少	淡灰褐	黒	
170	蓋	8.6	へらみがき	なで	0.5-8mm細礫	灰燈	暗灰	
171	瓶	4.4	不明	不明	0.5-2mm細礫多	白肌	淡白肌	底外面黒斑
172	壺	6.6	不明	不明	0.5-2mm細礫多	淡肌灰	淡灰茶	
173	壺	9.7	不明	割腫	0.5-3mm細礫多	淡灰茶		
174	壺	8.4	粗いはけめ なで	なで	0.5-1mm細礫	淡灰褐	暗灰黄	
175	壺	8.0	不明 なで	不明	0.5-2mm細礫	黄燈	灰褐	焼成軟
176	壺	6.8	へらみがき なで	なで	0.5-3mm細礫多	暗茶	白黄灰	
177	甕	9.7	不明	なで	1mm以下砂粒	淡灰肌	褐	内面炭化物付着
178	甕	5.6	へらみがき なで	なで	0.5-2mm細礫	淡灰燈	灰茶	
179	底部	6.5	なで	不明	1mm細礫少	淡茶灰	淡黄灰	
180	壺		へらみがき なで	なで	0.5-2mm細礫	白灰茶	淡灰茶	
181	瓶		不明	不明	0.5-1mm細礫少	淡灰肌	灰茶	
182	底部		不明	なで	0.5-3mm細礫	白灰茶	白灰黄	
183	底部		不明	不明	0.5-2mm細礫	灰燈	淡褐	
184	底部		不明	不明	0.5-3mm細礫多	淡燈	白灰茶	
185	底部		不明	不明	0.5-4mm細礫	淡黄燈	灰茶	焼成軟
186	浅鉢		よこなで へらけずり	よこなで	0.5-1mm細礫多	暗茶	灰茶	内面沈線 1条
187	浅鉢		よこなで へらみがき	よこなで	1mm以下砂粒	褐	茶褐	
188	深鉢		よこなで	よこなで なで	0.5-2mm細礫	白灰茶	白灰茶	口唇刻目 斜格子状沈線
189	深鉢		よこなで	不明	0.5-2mm細礫多	白肌	暗灰	口唇刻目 刻目突帯
190	深鉢		不明	不明	0.5-3mm細礫	暗灰	灰肌	刻目突帯 縦方向沈線
191	深鉢		不明	不明	0.5-3mm細礫多	褐	暗灰	刻目突帯
192	深鉢		なで	なで	0.5-1mm細礫	白灰肌	暗灰	刻目突帯
193	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5-2mm細礫	灰茶	白灰茶	刻目突帯
194	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5-2mm細礫少	暗褐	灰肌	刻目突帯
195	深鉢		不明	不明	0.5-3mm細礫多	灰褐	淡灰茶	刻目突帯 2条
196	深鉢		へらみがき	不明	0.5-2mm細礫多	灰茶	灰茶	縦方向沈線 4条残存
197	深鉢		なで 炭痕	なで	0.5-2mm細礫	暗褐	暗灰褐	爪形文 1段
198	深鉢		なで 炭痕	なで	0.5-2mm細礫多	淡灰茶	淡灰褐	爪形文 1段
199	深鉢		炭痕	なで	0.5-2mm細礫	暗褐	暗褐	爪形文 1段残存
200	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで へらけずり	0.5-2mm細礫	暗茶	灰茶	沈線 1条 炭化物付着

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎上	色調		備考
						外面	内面	
201	壺	5.0	なで みがき なで	なで	0.5-2mm細礫	淡灰肌	白灰茶	口径 4.2 器高 10.75
202	甕		よこなで	よこなで なで	0.5mm細礫少	暗茶	灰黄	刻目 凹線 煤付着
203	口鉢		不明	不明	0.5-2mm細礫少	暗褐	肌灰	炭化物付着
204	口鉢		不明	不明	0.5-2mm細礫多	灰肌	白灰黄	
205	鉢	21.8	よこなで 不明	不明	0.5-3mm細礫多	明灰肌	灰肌	炭化物・煤付着 軟質
206	壺		不明	不明	0.5-2mm細礫多	白灰黄	淡灰橙	焼成軟
207	口鉢		不明	不明	0.5-2mm細礫少	淡灰肌	白灰茶	焼成軟
208	甕		よこなで なで	よこなで なで	0.5-3mm細礫	燃灰	淡灰黄	口径刻目 沈線 2条
209	甕		へらみがき	なで	0.3-4mm細礫少	暗褐	灰褐	沈線 2条 炭化物付着
210	甕		不明	なで	1mm前後細礫少	淡灰肌	淡灰黄	沈線 3条
211	壺		へらみがき	なで	0.5-2mm細礫	暗茶	白灰茶	沈線 1条
212	壺	4.4	へらみがき	不明	0.5-3mm細礫	白灰橙	白茶	頂面黒色 焼成軟
213	蓋	11.6	へらみがき なで	なで	0.5-3mm細礫少	淡灰褐	白灰茶	煤付着
214	浅鉢	9.0	へらみがき なで	不明	0.5-4mm細礫多	白灰灰	淡褐	
215	鉢	6.8	へらけずり なで	なで	0.5-1mm砂粒	灰褐	暗茶	
216	鉢	7.8	なで	不明	0.5-3mm細礫	黄灰	暗黄灰	
217	壺	7.0	なで	へらけずり	0.5-2mm細礫	灰茶	淡灰褐	内面煤付着
218	甕	6.9	不明	不明	0.5-2mm細礫多	灰橙	白灰黄	
219	壺	6.0	不明	不明	1-3mm細礫	灰橙	褐	
220	壺	8.5	不明	不明	0.5-3mm細礫多	白灰橙	灰橙	焼成軟
221	壺	11.5	不明	不明	0.5-1mm細礫多	明灰橙	淡灰褐	
222	壺	10.6	なで	不明	0.5-2mm細礫	灰橙	暗灰茶	
223	甕	7.7	不明	なで	0.5-2mm細礫多	黄灰	淡褐	内面炭化物 2次焼成
224	甕	6.2	不明	不明	0.5-5mm細礫	白灰黄	白灰茶	
225	甕	8.4	不明	なで	0.5-3mm細礫多	白灰橙	白灰茶	内面炭化物付着
226	底部	8.1	不明	なで	0.5-2mm細礫少	灰茶	白灰茶	底外面煤付着?
227	底部	9.8	なで	なで	0.5-3mm細礫少	淡灰橙	灰茶	
228	壺		不明	不明	0.5-3mm細礫多	淡灰橙	灰橙	焼成軟
229	底部		不明	不明	0.5-2mm細礫	白灰肌	白灰肌	焼成軟
230	底部		へらみがき	不明	0.5-1mm細礫多	白灰灰	淡灰褐	
231	浅鉢		よこなで へらみがき	よこなで へらみがき	0.5mm以下砂粒	暗褐	暗褐	
232	浅鉢		不明	へらみがき	0.5mm以下砂粒	淡灰褐	淡灰褐	
233	口鉢		不明	不明	0.5-2mm細礫少	灰橙	灰橙	焼成軟
234	深鉢		不明	不明	0.5-2mm細礫	淡灰橙	淡灰橙	口径刻目 刻目突帯
235	壺	14.7	よこなで へらみがき	よこなで なで	1-3mm細礫多	淡灰茶	白灰茶	沈線 1条
236	壺		よこなで 染灰	よこなで なで	0.5-2mm細礫	暗褐	暗茶	煤・炭化物付着
237	甕	17.4	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5-1mm細礫	暗茶	灰茶	刻目 凹線 1条 炭化物
238	甕		よこなで	不明	0.5-2mm細礫	淡灰褐	白灰茶	刻目 凹線 炭化物 軟質
239	甕		よこなで	不明	0.5mm砂粒	白茶	白灰茶	口径刻目
240	甕		不明	不明	0.5-3mm細礫	暗茶	淡褐	口径刻目
241	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5-3mm細礫少	暗茶	暗茶	
242	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5mm砂粒	黒	褐	
243	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1-2mm細礫多	暗灰	暗褐	内面凹線 2条 穿孔
244	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで なで	0.1-2mm細礫多	灰茶	灰茶	口径刻目 斜格子状沈線
245	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5-2mm細礫多	白灰灰	灰白	口径刻目 斜格子状沈線
246	深鉢		不明	不明	0.5-3mm細礫多	灰白	灰白	口径刻目 斜格子状沈線
247	深鉢		染灰	なで へらけずり	0.1-0.5mm砂粒少	褐	淡灰灰	口径刻目 炭化物付着
248	深鉢		不明 へらみがき	不明	0.1-1mm細礫多	白灰灰	淡灰茶	刻目 沈線 焼成軟
249	深鉢		よこなで 染灰	よこなで なで	0.1-2mm細礫多	淡灰茶	灰茶	口径刻目 刻目突帯 押形文
250	深鉢		染灰 よこなで	よこなで	0.1mm砂粒	灰褐	暗灰茶	口径刻目 炭化物付着

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色 裏		備 考
						外面	内面	
251	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5mm砂粒少	暗灰褐	暗灰褐	押形文 炭化物付着
252	深鉢		なで	なで	0.5-1mm砂粒	暗灰茶	暗灰茶	押形文
253	甕		よこなで 不明	不明	0.5-2mm細礫	淡灰橙	白灰黄	刻目 炭化物 焼成軟
254	甕	6.9	不明	不明	1-2mm細礫多	淡橙	白灰茶	多条沈線 焼成軟
255	甕		よこなで	よこなで	0.5-2mm細礫	淡灰橙	灰橙	口唇押形文 焼成軟
256	甕		よこなで	よこなで なで	0.5-1mm細礫	淡灰茶	茶灰	口唇刻目 炭化物付着
257	甕		なで	不明	1-3mm細礫多	黒	白橙	沈線 2条 炭化物付着
258	浅鉢	7.0	へらみがき なで みがき	へらみがき	0.5-2mm細礫	黒	黒	
259	浅鉢	9.6	不明	不明	0.5-3mm細礫	灰黄	淡灰肌	焼成軟
260	鉢	6.3	へらみがき なで	へらみがき	0.5-2mm細礫多	淡灰褐	暗灰茶	
261	鉢	7.7	不明	なで	0.5-3mm細礫多	淡灰褐	灰茶	
262	深鉢	12.4	へらけずり なで	なで	0.5-2mm細礫多	淡灰褐	灰褐	外面煤 内面炭化物付着
263	底部	9.8	なで	なで	0.5-3mm細礫	白灰茶	淡灰	
264	底部	6.2	不明 なで	なで	0.5-2mm細礫	淡灰橙	灰茶	内面炭化物付着
265	底部	8.9	なで	なで	0.5-3mm細礫	淡灰茶	灰茶	内外面炭化物付着
266	底部	6.0	なで	なで	0.5-1mm細礫	暗灰黄	暗褐	内外面炭化物付着
267	底部	3.8	不明	不明	0.5-1mm細礫多	淡褐	白灰茶	
268	鉢		なで	なで	0.1-2mm細礫多	灰褐	白灰茶	突帯 刺突文 沈線
269	浅鉢	33.4	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.1-1mm細礫	淡褐	淡灰茶	
270	鉢	21.0	よこなで みがき なで	よこなで はけめ	0.5-2mm細礫	淡灰	灰肌	内外面炭化物付着
271	浅鉢	31.0	へらみがき	へらみがき	2mm以下細礫	暗褐	灰褐	波状口縁 朱塗り
272	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1-1mm細礫多	淡褐	淡灰褐	波状口縁
273	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.1-2mm細礫	黒	淡灰褐	炭化物付着
274	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1-1mm細礫	淡灰茶	淡灰茶	回線 1条残存
275	深鉢	30.9	なで へらけずり	なで へらけずり	0.1-2mm細礫多	淡灰茶	茶灰	刻目 押形文 炭化物
276	深鉢		なで 条痕	なで	0.1-3mm細礫多	暗褐	白茶	口唇刻目 刻目突帯 押形文
277	深鉢		なで 条痕	なで へらけずり	0.1-2mm細礫	淡褐	暗褐	口唇刻目 刻目突帯 炭化物
278	深鉢		よこなで 条痕	よこなで なで	0.1-1mm細礫多	淡灰茶	褐	刻目突帯
279	深鉢		よこなで	よこなで なで	0.1-1mm細礫多	暗褐	灰褐	口唇刻目 刻目突帯 炭化物
280	深鉢		なで 条痕	なで	0.1-2mm細礫多	暗茶	淡灰茶	頸部承形文 炭化物
281	深鉢		なで 条痕	なで	0.1-1mm細礫多	暗茶	暗茶	口唇刻目 炭化物付着
282	甕	8.6	へらみがき なで	なで	0.1-5mm細礫	淡灰茶	白灰	焼成軟
283	甕	9.1	へらみがき なで	不明	0.1-2mm細礫	淡茶灰	黒	内面炭化物付着
284			問文?	なで	0.5-1mm細礫少	茶褐	灰褐	
285	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5mm以下砂粒	灰褐	暗褐	

石器観察表

	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
S1	打製石鏃	2.8	1.9	0.35	1.8	サヌカイト	未製品 自然面残存
S2	刮片	3.0	2.2	0.4	2.3	サヌカイト	
S3	刮片	3.2	1.6	0.25	2.2	サヌカイト	風化著しい 乳白色
S4	刮片	3.0	2.0	0.3	2.0	サヌカイト	風化
S5	敲石	12.3	6.8	3.1	382	花崗岩	自然石?
S6	敲石	13.7	11.3	11.0	2479	花崗岩	
S7	楔形石器	2.3	2.65	0.3	1.3	サヌカイト	
S8	刮片	4.15	2.5	0.5	5.7	サヌカイト	
S9	磨製石包丁		5.2	0.9	26.3	砂岩	2/3 欠損
S10	打製石鏃	1.55	1.6	0.2	0.5	サヌカイト	
S11	刮片	5.5	1.75	0.8	5.4	サヌカイト	
S12	打製石包丁	7.7	5.2	0.95	36.3	サヌカイト	
S13		4.3	1.8	0.55	4.1	サヌカイト	ほぼ全面磨滅
S14	刮片	5.5	2.1	0.8	12.1	サヌカイト	自然面残存
S15	打製石鏃	4.3	2.6	0.45	2.3	サヌカイト	風化
S16	刮片	2.8	3.1	0.5	4.5	サヌカイト	自然面残存
S17	打製石鏃	2.8	1.7	0.4	1.9	サヌカイト	未製品
S18	刮片	3.2	1.3	0.8	2.8	サヌカイト	
S19	刮片	2.7	2.5	0.4	1.8	サヌカイト	
S20	打製石鏃	2.1	1.4	0.4	0.8	サヌカイト	
S21	打製石鏃		1.7	0.3	0.8	サヌカイト	先端欠損 自然面残存
S22	打製石鏃	1.9	1.4	0.25	0.5	サヌカイト	
S23	楔形石器	2.6	1.9	0.45	2.1	サヌカイト	下辺刃潰れ
S24		3.75	1.45	0.4	2.9	サヌカイト	打製石槍?
S25	刮片	5.8	2.5	0.55	9.9	サヌカイト	
S26	刮片	1.45	4.6	0.75	5.7	サヌカイト	
S27	刮片	4.6	3.2	1.05	15.7	サヌカイト	
S28	刮片	4.45	3.3	1.15	13.7	サヌカイト	
S29	刮片	3.5	1.8	0.6	3.1	サヌカイト	
S30	刮片	3.2	1.5	0.5	2.1	サヌカイト	

	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
S31	敲石	13.2	5.9	3.95	401	花崗岩	下端打撃痕 自然石?
S32	砥石?	14.8	7.0	2.65	478	砂岩	上下面摩滅
S33	打製石鏃	10.0	7.4	2.0	199	サヌカイト	先端磨滅
S34	刮片	4.0	1.75	0.6	4.7	サヌカイト	
S35	刮片	3.9	2.05	0.75	6.1	サヌカイト	自然面残存
S36	刮片	3.8	2.35	0.45	3.6	サヌカイト	
S37	刮片	4.0	2.15	0.5	3.0	サヌカイト	自然面残存
S38	刮片	4.4	3.65	0.75	11.0	サヌカイト	自然面残存
S39	刮片	3.45	2.55	0.9	8.7	サヌカイト	
S40	磨石	8.95	7.2	6.5	542	花崗岩	周辺打撃痕 上下面磨滅
S41	敲石		7.8	6.0	499	花崗岩	先端打撃痕 一部欠損
S42	敲石	12.1	4.1	3.0	200	花崗岩	全面磨滅
S43	石鏟	5.2	4.6	1.2	44.2	砂岩	
S44	磨石	6.0	3.9	2.05	69.4	流紋岩	上面摩滅
S45	磨石	11.9	9.3	2.9	443	砂岩	上下端打撃痕 下面磨滅
S46	砥石?	15.3	14.3	3.8	1238	砂岩	上面に溝状窪み
S47	楔形石器	6.3	4.5	1.05	37.9	サヌカイト	
S48	刮片	4.4	3.1	1.4	22.5	サヌカイト	
S49	磨石	7.9	8.5	6.1	736	凝灰岩	周辺打撃痕 上下面磨滅
S50	磨石	14.6	8.2	3.6	558	花崗岩	先端打撃痕 全面磨滅
S51	石鏟	6.9	4.1	1.2	46.1	砂岩	
S52	石鏟	12.35	6.6	1.2	169	砂岩・泥岩	ほぼ全面磨滅
S53		13.1	8.0	4.3	460	砂岩	上下面摩滅
S54	打製石鏃	1.95	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	
S55	スクレイパー	4.9	4.0	0.9	21.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S56	楔形石器	2.8	2.4	0.5	4.9	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S57	楔形石器	4.2	2.5	0.8	8.8	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S58	刮片	2.2	3.5	0.8	7.4	サヌカイト	自然面残存
S59	刮片	4.1	2.7	0.7	7.3	サヌカイト	自然面残存
S60	磨製石斧	14.2	5.2	3.5	362	砂岩	先端欠損

	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
S61	磨石	7.85	5.4	1.95	115	花崗岩	全面磨滅
S62	磨石	14.8	11.4	8.0	1970	花崗岩	端部打撃痕 平面磨滅
S63	砥石		8.6	6.5	450	花崗岩	先端打撃痕 平面磨滅
S64	砥石		10.4	5.5	572	花崗岩	先端打撃痕 上下面磨滅
S65	磨石	13.2	10.1	6.4	1138	花崗岩	側辺打撃痕 上下面磨滅
S66	剥片	2.7	2.1	0.45	2.2	サヌカイト	自然面残存
S67	剥片	4.9	1.3	0.7	3.1	サヌカイト	
S68	スクレイパー	4.2	4.5	0.5	12.3	サヌカイト	
S69	スクレイパー	5.5	4.1	0.6	12.2	サヌカイト	下辺刃潰れ
S70	楔形石器	3.2	4.3	1.4	21.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S71	剥片	6.1	2.25	0.9	13.8	サヌカイト	
S72	剥片	9.05	3.0	1.0	39.3	サヌカイト	自然面残存
S73	磨石	5.6	3.5	1.6	40.6	砂岩?	全面磨滅
S74	スクレイパー	5.4	3.5	0.4	8.1	サヌカイト	自然面残存
S75	剥片	5.4	3.2	0.7	11.4	サヌカイト	
S76	打製石鏃	13.3	6.5	2.2	226	サヌカイト	上面磨滅
S77	楔形石器	5.2	3.2	0.7	10.3	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S78	楔形石器	5.2	3.3	0.6	10.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S79	剥片	6.25	4.85	1.1	29.4	サヌカイト	自然面残存
S80	剥片	7.3	3.9	0.7	21.2	サヌカイト	
S81	石皿	25.0	16.3	12.7	6100	花崗岩	全面磨滅
S82	磨石	13.1	10.0	4.7	929	花崗岩	上下端打撃痕 全面磨滅



写真1 調査地周辺航空写真(1992年7月27日撮影 1:12,500 上が北)

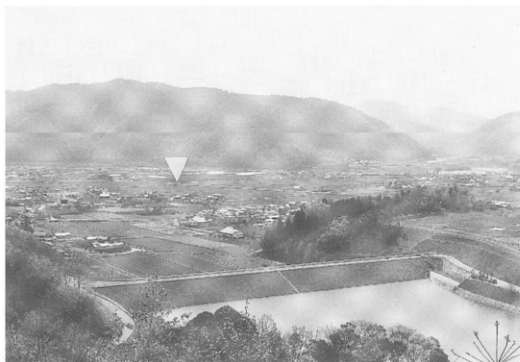


写真2 調査地過景（西から）



写真3 第1遺構面（東から）





写真4 第2遺構面（東から）

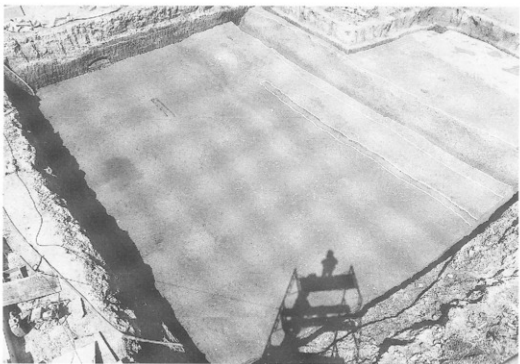


写真5 第3遺構面（東から）



写真6 第4遺構面（東から）



写真7 第9（最終）遺構面（東から）

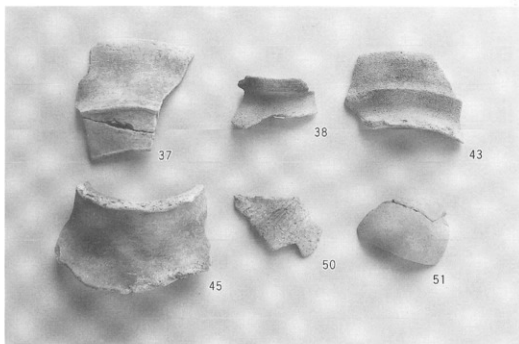


写真8 第2層上層出土土器

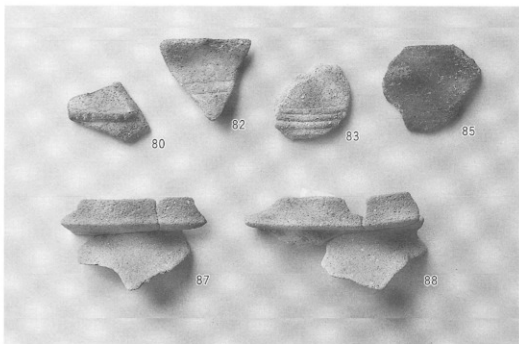


写真9 第3層出土土器

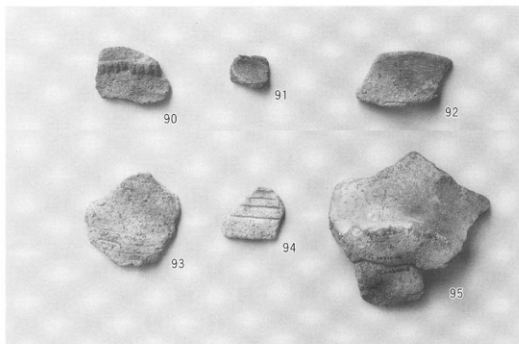


写真10 SD01出土土器

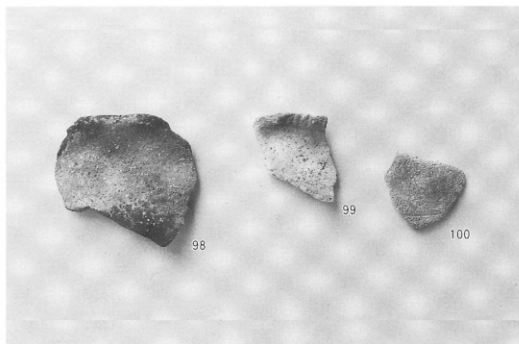


写真11 SD02出土土器

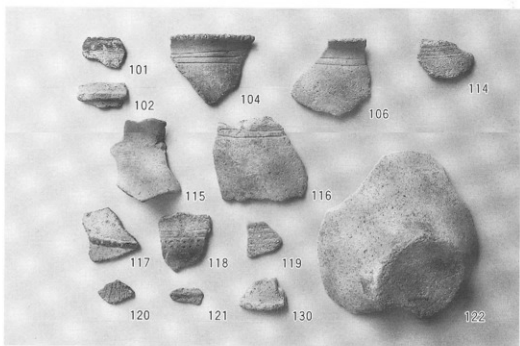


写真 12 第4層上層出土土器

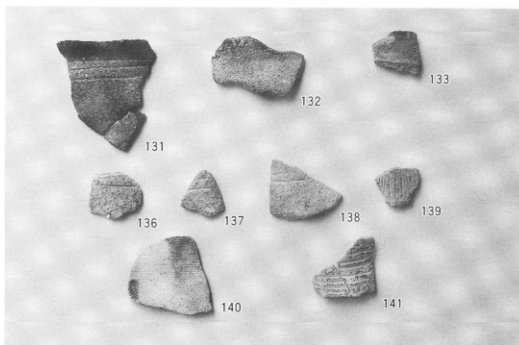


写真 13 第4層下層出土土器

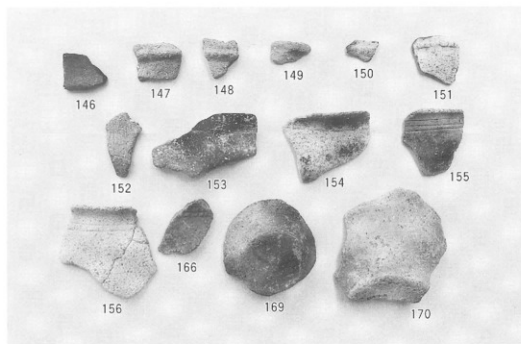


写真 14 第 5 層上層出土土器

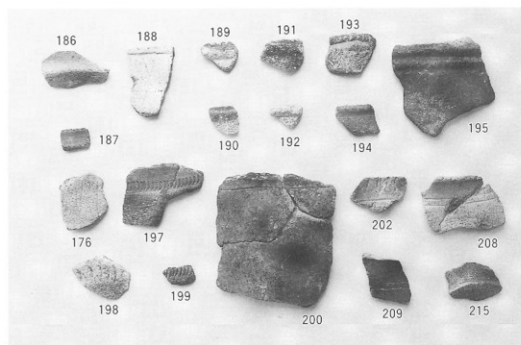


写真 15 第 5 層下層出土土器

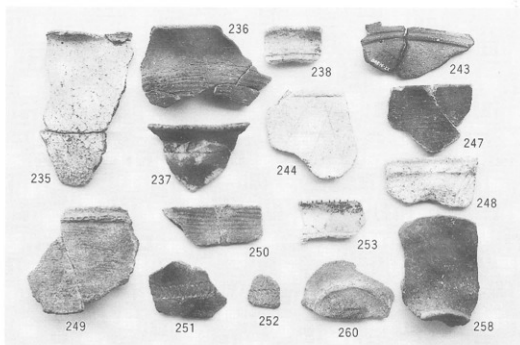


写真16 第7層出土土器

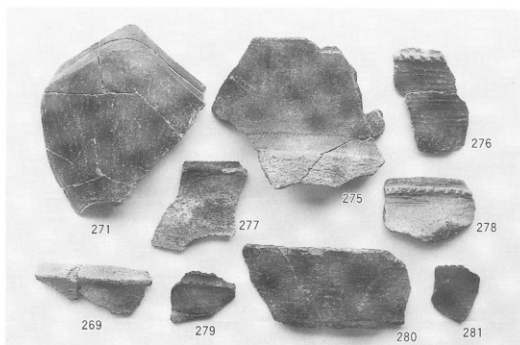


写真17 第9層上層出土土器

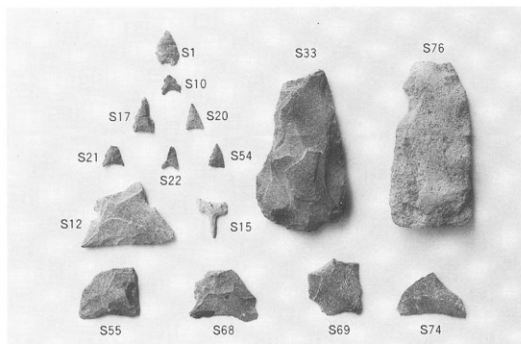


写真 18 出土打製石器

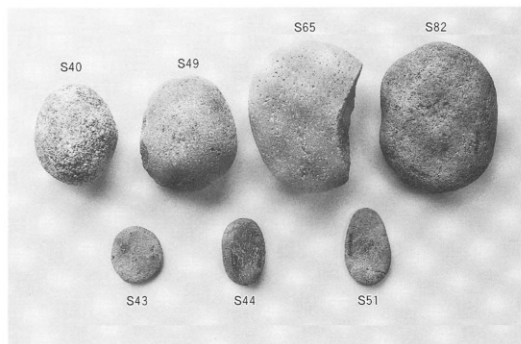


写真 19 出土磨製石器



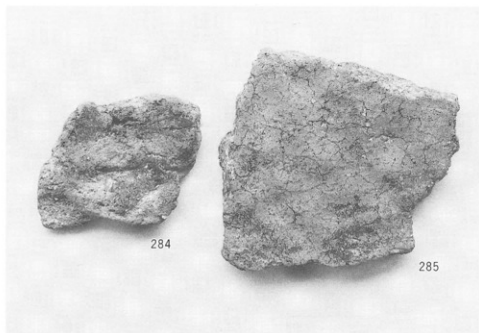


写真 20 第9層下層出土土器

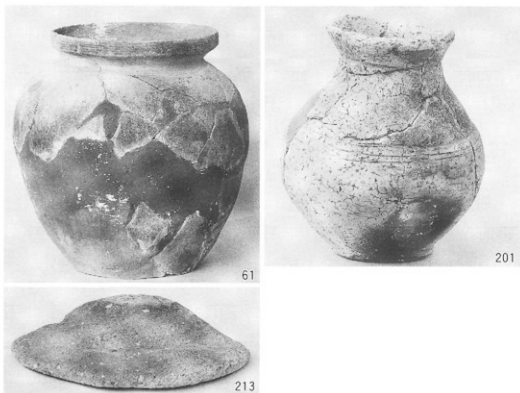


写真 21 出土遺物 (1)



268



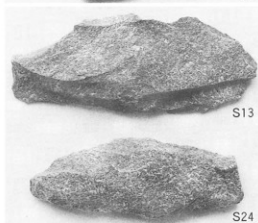
270



S9



S46



S13

S24



S81

写真 22 出土遺物 (2)

## 報告書抄録

ふりがな	びぜんはらいせき							
書名	備前原遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御津町埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	10							
編著者名	長谷川一英							
編集機関	御津町教育委員会							
所在地	〒709-2121 岡山県御津郡御津町字垣 1629 TEL0867-24-1711							
発行年月日	西暦 2002年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
備前原遺跡	岡山県御津郡 御津町 大字 平垣 字山條	33301	—	34度 46分 58秒	133度 55分 42秒	19900318 ～ 19900531	300	消防署建 設に伴う 事前調査
収集遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
備前原遺跡	集落	縄文	水田 溝 2条 河道	縄文土器、弥生土器、 石器		縄文から中世までの複 合遺跡 水田面を検出 河道より縄文晩期の土 器		

---

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 10

## 備 前 原 遺 跡

2002年3月31日発行

発 行 岡山県御津町教育委員会  
〒709-2121  
岡山県御津郡御津町字垣1629

印 刷 株式会社 **みつ印刷**  
〒701-1145  
岡山県岡山市横井上786-1  
TEL 086-294-2302

---